

ふんぞり霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふんぞり、風

第105号 (2015年2月)

風に吹かれて (83)

白井啓治

『メジロがチチと鳴いて梅がほっこり膨らんで』

異常、異常と言われている、早まったり遅れたりしながらも四季という時は確実に巡って来る。庭の蔭の臺も、陽気に添ってほっこり膨らんだり止まったりしながら、春を窺がっている。梅の木に頻繁にメジロが訪れチチと鳴くと、硬い蕾が鳴声に呼応するようにほっこりとしてくる。

ひきかえ人間社会は日々に、年々に殺伐としてくるように思え、末法思想だとか人類生滅論などが切実さを持って迫ってくる。

人は三人集まると派閥が生れ対立が生れると言われるが、人口の密集しすぎた人間社会には、種が減るまで対立と闘争が無くなることはないのだろう。世界中で起きている無為な諍いを見ていると、協調や助け合いとは単なる言葉だけでしかないように思えてしまう。

今年には戦後70年を迎える。我が国の戦後70年に先立ち、1月27日アウシュビッツ解放70年を迎えた。ドイツでは敗戦40年にワイゼッカー大統領が過去に目を閉ざすものは、現在にも盲目となる、と演説し、ナチスドイツの過去と正面から向き合っ

て現ドイツを導いた。

一寸というか相当に意味は違うが、日本の某総理大臣は「もう戦後ではない」と言ったが、その所為ではないだろうが、今では「戦後」の意味も理解できない日本人が大勢いる。

少し前の某新聞に、戦後という言葉は忘れてはいけない、という記事が出ていた。憲法9条の意味や存在すら知らない者、無関心な者が大勢いることを思うと、新聞の記事ではないが、戦後という言葉は捨ててはいけないと思う。戦後70年、戦後100年、戦後150年というように、二度と愚かな間違いを起さないよう「戦後」という言葉を使い続け、残して行くことが重要であろう。

広島、長崎の原爆投下から70年、そして終戦から70年。人の一生から言えば「古稀」である。いまその70年を振り返った時、古稀(稀に長生き)なんてことを言いながら古き事として忘れてはならないだろう。戦争を知る多くの者の心の中には被害者意識としての70年が色濃く残っているのではないだろうか。終戦の現実には「侵略戦争に負けての終戦」である。嫌がる人も大勢いるだろうが、正確に言うなら「敗戦による終戦」なのである。

市民感覚では、戦争に勝とうが負けようが被害者である。戦争は何時でも仕掛けた張本人が戦うものではなく、戦いを好まぬものが強制されて戦うものである。広島・長崎の悲劇も戦争を仕掛けた者達が生

み出した、戦いを好まぬ者達の悲劇である。

原爆という兵器の非人道性を叫ぶのではなく、戦争そのものの廃止を叫ぶべきであろう。従軍慰安婦を強制されたという朝鮮人女性の言葉に、「強制的であろうがなかるうが戦争というものがなければ従軍慰安婦などは存在しないのだ」という叫びがあったが、彼女には被害者としてではなく人道を生きる者としての言葉があり、人道の重大さを思い知らされた。

人類に戦争という我欲の固まりが存在しなければ機関銃も必要なかったし、より多くの殺人を可能とする原子爆弾の開発も必要なかった。そんな風に考えや思いを巡らしていると、某紙にあった「戦後」という言葉を捨ててはいけない」は切実とらえ、自分もそう声に出さなければいけないと思う。

憲法9条は、その成立過程がどうであれ、日本人として未来永劫に人類に誇るべき条文であろうと断言できる。日本国憲法第9条にノーベル平和賞を、と声を大にして世界に訴えていいだろう。いま、世界中でテロという第三次世界大戦というべき戦争が頻発している。綺麗事を言っていたら国を護れないという者達がいる。しかし綺麗事のない国なら、綺麗事を言えない国ならば、私はそこに暮らしたいとは思わない。

暮らして思い出したが、生滅可能都市ランキングなるものが公表され、衝撃を受けた人もいるだろう。この地のランキングが幾つなのかは知らないが、実際には地方都市が消滅するのではなく、今のシステムだと地方自治体が消滅する、という意味なのである。憲法9条の改正だなんだという前に、まずは中央集権的システムの早急な見直しをすることが必要だと思っただが。

この惑星に生命が誕生してほぼ40億年。この間あらゆる生物は「原初の生命」が獲得した「生命の設計図」を、親から子へとバトントッチして、生命の鎖を繋いできた。設計図は環境の変化により適時改変され、単細胞から多細胞へと進化し、今日、約一千万の種が生存している。我々「ホモ・サピエンス」は、その中の一種にすぎない。

先月号「駕籠かき家業」で、人生100年（30年後の予測）は一面から見れば、生命の設計図の運び屋に過ぎない。生物は全て設計図どおりに成長・繁殖し行動する。我々はいわばDNAという物質に支配され、悠久の時間の流れの「一瞬」を担い、歯車一枚の任務を果たす。親は用がすめば、ただ消え去るのみ……とヒルな見解を述べた。

今月は、なるほど物質体系として、「種」を維持するための設計図は、確実に子孫に伝わる。だが、生き物は、肉体や生理機能など、物質面のみ親から子に伝承しても、「種」の存続を図るのは不十分。何か「知的な創意工夫」を子孫に伝達しなければ、種が安全に永続できない……と強く感じられる。即ち、設計図通り安全に成長・繁殖するためには、親が生存中獲得した、自分なりの創意工夫や体験を、知的財産として精神面の伝承が必要である。それには「書」として残すのが最も効果的である。野生動物の親は、保育期間中、しっかりと生存のノウハウを子供に教える。そしてある程度成長すれば、冷たく突き放す。人類も、家庭や学校など公共の機関で「教育」が最重要と考える。

*

あらゆる生き物をつらつら見るに、生命の設計

図の鎖が切れないよう、環境に順応して、体型や機能を進化させ、生存に有利な変化を遂げた者のみが、子孫を残す事ができる。うまく適応できなかった者は、この世から消えて行く。

進化とは合目的ではなく、ランダムに起こるもの。「進化」というより、「変化」ぐらいに考えた方が適切である。ある種が、ある方向に進み出すと、生存に不利でも歯止めが利かず、突進する傾向がある。オオツノシカは、更新世後期にヨーロッパに繁栄し、体重500kg、角の重さ50kg。角が大きくなり過ぎ、それが災いして滅亡した。

また体が大きくなり過ぎて俊敏さに欠け、敏捷な肉食動物に対抗できず、滅びて行ったものもある。南米先住民インディオの口承で、昔は巨大なナマケモノがいた……と伝えられているというが、1万年ぐらい前に滅びたオオナマケモノは、体長6mで象ぐらいの大きさ。ジャガーなどの絶好の餌食となって滅びた。

更に全ての動物にとって必須アミノ酸は、一定量必要であるが、特に草食動物にとって環境に必須アミノ酸の含有量が少ない植物のみだったら、要らざる余分の草を多く食べざるを得ない。すると、必須アミノ酸以外の栄養分は過剰になり、それが生理機能を乱し、種として繁栄できなかつた例（馬）もある。それゆえ馬は余分のエネルギーを捨てるため、走りまわらざるを得なくなつた。北米大陸で進化した馬は北米では滅亡し、ベーリング海峡が陸続きだった頃、ユーラシアに渡つた馬のみが生き延び、今から6千年前、ウクライナあたりで人に飼育された事により、家畜馬として生き残つた。なおモウコノウマ以外、現在野生の馬は世界のどこにも存在しない。ムスタングなど

野生の馬と言われるものは、悉く家畜化した馬が逃げだしたものである。インディアンが、西部劇で活躍する馬は、白人がヨーロッパから船で運んだ家畜馬の子孫である。

【馬族雑学…ロバの雄とウマの雌の雑種はラバといい、両親よりも賢さ・持久力・寿命ともに優れる。雑種強勢の一例である。ロバの雌とウマの雄との雑種はケツティといい、ラバより鈍重だが扱い易い。ただし、ケツティの雄には繁殖能力がない。雑種強勢は全てに通じるものとは限らない。近縁なら子ができるが、孫はできない例もある。

なお余分な事だが、最近の学会では「犬」という「種」は、分類学上存在しなくなる可能性がある。理由は、人が狼を飼育して家畜犬となつて、まだ1万年ほどしか経たず、遺伝子は狼とほとんど変わらない。それゆえ犬は狼のチョット変わった仲間にならず、分類上、狼という事になる。】

*

現在、世界の総人口は約72億人。哺乳類でこれだけの数を誇る動物は他にいない。さればこれまでにこの人口を生み出した祖先は、即ち生まれては死んでいった人類の総数はいかほどであったのか？ という長年の疑問が私にはあった。ところが先日ある新聞のコラムにその答えが載っていた。香原志勢という人類学者の推計によると、人類が「石斧（せきぎょ）」など道具を用いるようになったおよそ250万年前以降の累積人口の試算は、1120億人との事。考えてみればこの1120億人が生存中、色々工夫した「生存術」を、今、我々が遺産として受け継いで生きている。

人が生きていくためには、生命の設計図だけによる肉体の活動だけでは、機微な心の動きを描く

文学や芸術は生まれてこないだろう。勿論科学の真髓を伝えることもできないだろう。優れた文学作品は、世界の隅々まで行き渡り、何億人もの心に感動を与える。物作り職人の細心の技法・音楽・絵画・彫刻・舞踊など、いかほど先輩の工夫改善が後輩を育んだことか。そしてスポーツの世界でも先輩の努力により、新技術が開発され、それを基礎として、新しい記録が更新されていく。そしてこれらを体系的に教育する各種学校・大学などにより、文明は進化してきた。

そして職人技などを伝達する方法として、手とり足とり指導するやり方もあれば、「書」に記し、時と場所を超え、事細かに他国の人にも伝達する方法もある。中国春秋時代の「孫子の兵法」は、千年以上も経た日本の戦国時代でも、盛んに活用された。またアインシュタインの相対性理論は、今日宇宙開発の基礎理論となっている。そして人類に伝染病を引き起こす各種病原体の発見とその対応策など、先輩医学者の血みどろの戦いの成果であり、種の存亡にかかわる重大な遺産である。これまで栄えた文明は、悉くこれら先人の創意・工夫によるものである。

*

私など偏屈とも言える唯物史観に立つ者は、人間の喜怒哀楽・愛や憎しみも、所詮は物質体系である生きた細胞の生化学反応の所産と考えている。しかしそれはあまりにも偏屈で、もつと別の面からの解釈もあり得るのかもしれない。いづれにしても自分なりに考えだした「知識」は、DNAとともに、知的な遺産として、子孫に伝達していくべきものなのであろう。

【1987年、生理・医学賞のノーベル賞受賞者

利根川進教授は、免疫グロブリンの遺伝子構造解明で受賞した人だが、受賞以降の研究テーマは、脳神経科学部門。人間の心も、物理・化学の原理で説明できるのではないか……という事らしい。細胞内の生化学反応の結果が「心」を生み出す。ならばどんな分子どうしが、どんな反応をした時、どんな心が生じるのか？……と追及しているという。実は私も、いつもその事を考えてきた。60年前の高校時代、校内新聞にその事を書いている。去る同級会で、旧友に、君は60年前と全く同じ事を、今も書いている……と言われた。

高2の頃、フランスの外科医アレクシス・カレル（1912年ノーベル生理・医学賞受賞。血管縫合の新技術開発者・臓器移植のバイオニア）の「人間この未知なるもの」という本が、私の一生を方向付けたと言える。人間を物理・化学的に理解しようとするものである。人間を精神面から分析・称賛するような風潮の時代、人間は他の動物と、どこが違うのか？ 肉体と心を物質体系で理解しようとする方法はないのか？ 高度の精神活動は、どのような原理で起こるのか？ など私は明けても暮れても考え続けている。】

*

さて知的なものの伝承であるが、それは、なぜ人類はこれだけ大脳を膨らましているのに、野獣にも劣る凶暴性を捨てきれず、殺人・戦争などが、ちっともなくならないのか。先人の願望として、平和希求という文化を、なぜ子孫に徹底伝承できなかったのか？ 一部過激で強欲な闘争心を社会システムとして、なぜ排除できなかったのか？ 21世紀を迎える頃は、当然、全世界は人類の叡智を集めて真に住みよい惑星になっているものと

思っていたが、そんなものは、はるか夢のまた夢。人類が永遠に求めてやまない「ユートピア」とやらは世界のどこかに存在するであろうか？ 人類が一番欲しいものは、世界の恒久的平和ではないのか？ ならば何はさておき、まずその実現に全世界が全力投球すべきである。本邦では極楽浄土を夢見た奥州藤原3代の平泉文明も、猜疑心の強い源頼朝により破壊されてしまった。全世界を見ても、侵略戦争は至る所で見受けられ、むしろ戦争のなかった時代など探すのに苦労する。

「国連」とやらは、ままたごと遊びのお巡りさんではなく、全世界が共同出資した強力な組織で、いずこかに、ならず者国家が台頭し、周囲を侵略するなどの傾向が見えたら、直ちに行動。発芽の段階で抹殺する。超強力な統治権を持ち、例えば宇宙人が攻めてきた時、内紛などしている場合ではない。地球が丸となって対処するくらいの覚悟で、徹底鎮圧すべきである。

諦めてはいけない。そもそも原始の生命が「利己的な遺伝子」により支配され、我々はみなその子孫なのだからやむを得ない……。それでは「ダメよーダメダメ」。人類が万物の霊長と言われるのなら、天使のように高潔であるべき。いや、それほどでなくともよい。せめてゴリラ並のもう少し心穏やかな動物であってほしいと日頃願っている。

*

人は誰でも一生の間に体験した事柄は、子孫が生き残る智慧として、何らかの役に立つはず。即ち「体験談の伝承」である。その数例を紹介する。私が外務省の嘱託として中米に滞在し、獣医技術移転の仕事をしていた頃、日本では死亡率の高い豚の伝染病が、調べてみると当地にも存在する。

しかし病原体は存在しても、決して「病氣」は存在しない。その理由は飼育密度の少ない飼い方をすれば、ストレスが少なく病氣にはならない。日本では狭い所にギューギュー飼ひ、強い豚が弱い豚を苛める。それがストレスで豚は病氣になる。すべてがそうだとはいわないが、そういう事例もあるという事。人間も教育や企業の現場で競争が激しく、ストレスのため神経を病む事例は多数ある。自然界の現象は、謙虚に学ぶべきである。

また、キリスト教原理主義のアメリカ人集団が、中米の他国で周囲を鉄柵で囲いコロニーを形成。500人ほどで役場・学校・教会・発電所・農場など自給自足の生活をしている。聖書に書いてあることのみを真実とする。地動説など、単なる一説に過ぎない。人類が猿の仲間から進化した：など、とんでもない話。アメリカの州によつては、進化論の授業を禁止し、教えた教師は未だに襲撃されたりしている。そんな国もあるのだ。

また平和ボケした現在の日本人には理解しがたいことだけでも、治安と衛生の悪さは、次元の異なる世界のように見える。郵便物が届かない。手荷物はちよつと目を離せばすぐなくなる。交通違反は警官に袖の下で、いかようにでもなる。

又ある深夜、ホテルの近くで銃声が聞こえた。翌朝通訳に聞いたら、銃声の主は、長年働いてやつとテレビを買った。ところが国営の発電所は予算不足でしょつちゅう停電。楽しんでいたサッカ―放送がパタリと切れた。頭にきて、マシンガンを持ち出し自宅の塀に向かって乱射したのだという。誰でも銃を持っている怖さ。アメリカでは、コンビニの数より銃販売店の方が多いという。これでは到底日本並の治安の良さは確保できまい。

上水道にアメーバ赤痢菌が混入している。はこの菌により3日で7kgも痩せる赤痢を経験した。昨年夏大騒ぎした Dengue 熱や、マラリアが常在。毒蛇・毒蜘蛛はその辺にいくらでもいる。犬猫は勿論、コオモリ・スカンク・アライグマなどに狂犬病はいくらでもある。海外旅行するのに狂犬病ワクチンを接種せず、旅立つ人の気が知れない。

*

しかし、発展途上国は、全てが危険だらけというでもない。特に私が滞在したラテンアメリカは、極めてのんびり・楽天的。熱帯ということもあり、昼休みはほぼ3時間。まるで夜寝ないで遊ぶためにしつかり昼寝をする。夜2〜3時頃は、音楽とダンスで、いずこも花盛り。むやみやたら私生児が多い。尤も熱帯なら「衣食住」は殆どどうにかなる。熱帯という所は、衣類はチョコット大事などところを隠せばよい。食糧は、自然の果物などいくらでもその辺に存在する。マンガローなど道端に落ちていても見向きもしない。パイヤ・オレンジ・バナナなど無造作にその辺で実っている。木で熟したバナナはかなりおいしい。ヤシの実など種類によつて果汁は真においしい。住宅は雨露を凌げればOK。人は緯度の高い地方に住むから冬への備蓄のため、蟻の勤勉さが要求されるが、熱帯は贅沢しなければ、いつもキリギリスで遊んで暮らせる。老後は、日本の年金をいただいで、熱帯で暮らすのが夢だった。但し衛生と治安をいかに克服するかが悩みの種。

更にカリブの楽園ホンジュラス国ロアタン島。人口32000人、面積261平方km。グレートバリアリーフに次ぐ、世界第2位の珊瑚礁の島。英語とスペイン語。多民族のミックス。商店で物

を買う時、オマケできないかと言ったら40代くらいの奥さんいわく、『今夜、私を抱いてくれたら、ただでもいいよ!』ときたもんだ。正に極楽とんぼの島。超明るく楽天的。楽しむならカリブの島。

海岸のホテルの庭。ヤシの木2本の間にハンモックが吊るしてあり、その脇にガーデンテーブルがある。ブラリブラリ揺られ、星空を眺めながら、テキーラに酔いしれる。カニ・エビ・貝類など、豪華で、超安い。ホテルのお姉さんにチップをやり、リクエストしたら衣装を整え見事な脚線美。月明かりの庭で、情熱のフラメンコを夢中で踊ってくれた。正に「月下美人」である。

誘われて、プンタ・サルサなどダンスを教わったが、所詮還暦過ぎの身には、習得ならず。やはり、ハンモックに揺られながら、満天の星空の下、大陸移動説・人類の遙かなる旅路・世界平和などについて、ほろ酔い機嫌で妄想を続けている方が私にはよく似合う。そして子や孫に異文化を、語り伝えたいとしみじみ思った。

*

現代人が次世代の人々のためになすべき重要課題は、地球温暖化防止の強化策である。20〜21世紀の我々が、こんなに破壊した地球を、子孫に引き渡すわけにはいかぬ。異常気象による集中豪雨、それに伴う地滑りなどで多くの人命が失われている。竜巻・ハリケーンなど莫大な被害が続出している。そしてマラリアなど熱帯病が、中緯度地帯への蔓延を防止しなければならない。健全な遺伝子の継承と、子孫が安全に生き残るための知的対応策の伝達こそ、最重要なテーマと考える。

徳川家康、家光などから絶大な信頼を得て、江戸の町作りから日光の墓所決定まで徳川幕府の基礎造りに絶大な影響力を持ったといわれている「天海大僧正」がおります。

この天海僧正は生まれがあまりはつきりせず謎めいたところが多く、天海の筆跡が明智光秀に非常に似通っていることや、家康の墓所を日光に決めたのは天海の教えによるものであって、日光の眺めの良い台地に「明智平」と命名したのは天海であるといわれていることなどから明智光秀が死なずに名前を変えて現われたのではないかなどともいわれています。このあたりは多くの歴史謎み物でもしるミステリーなどとして取り上げられています。稲敷市の江戸崎不動院の住職をしていたことはあまり紹介されていません。

108歳まで生きたといわれる天海僧正に、やはり江戸崎不動院の入口の石段も108段あり、この階段を上れば長生きができるともいわれています。

この江戸崎に昔話を紹介しているサイト（江戸崎の昔話）があり、この天海僧正の話もいくつか紹介されています。まあ一般には干ばつで困っていたところに天海が法力で雨を降らせたという逸話が主体で、この話は近くの大杉神社なども関係していると考え、奇跡を起こした法力の持ち主だったというものです。しかし、その中で私が特に面白いと思ったお話「へっぴり坂」を一部抜粋して紹介します。

不動院の院主になるには、あるしきたりがあった。

不動院が本寺でその下に格が一番上で古渡の円密院、二番目阿波崎の満願寺、そして三番目沼田の吉祥院と末寺が三つあり、院主は末寺の円密院と満願寺から選ばれるしきたりになっていた。このしきたりは戦国時代末期までこの江戸崎の地を治めていた土岐の殿様がつくったしきたりだった。

ところが芦名の殿様はこのしきたりを無視し、会津の城で信頼していた天海僧正を連れて来て、不動院の院主にしてしまった。

さあ、おもしろくないのが円密院と満願寺のお坊さんたち。雨を降らせたりする奇跡まで起こしてますます名声を上げている天海へのねたみも手伝って、天海を殺そうか追放しようかという動きが日に日に強まっていった。

そんなとき、突然芦名の殿様が秋田へ国替えすることになった。円密院と満願寺の坊さんたちが小躍りして喜んだのはいうまでもなかった。

芦名の殿様が行列を従えて江戸崎を離れた日の夜。天海は昼間の疲れから早めに床に入り、うとうとし始めた時だった。カシャカシャという変な物音に気づき、雨戸を細めに開けて外を見るとびつくり仰天。十人ほどの男たちが手に手になぎなたや刀を持ち、今押し入ろうとしていた時だった。天海は腰を抜きしそになり、あわてて裏門から寝間着姿のまま飛び出した。裸足のままだった。ひたすら西の吉祥院へ向かって駆け出した。すぐそこに坂があり震える足で下り始めたとき、なんと恐怖からおならがプツと出てしまった。その後その坂は「へっぴり坂」と呼ばれるようになったという。

まあこんなたわいもない話です。

しかしくだらぬ話ほど面白いこともある。そんな気がしてこの円密院や満願寺、それに逃げ込んだといわれる吉祥院なども見て回りました。古渡（ふると）にある円密院は国道125号線沿いにある「大聖歡喜天」の目立つ建物が興味をそそられますが寺は特にこじんまりとしたものでした。また満願寺は阿波崎（あばさき）にあり現在は多少荒廃していますが北条政子が鹿島に詣でた時に立ち寄って運慶に像を彫らせて寄進したというような話も伝わります（真偽は不明）。また天海が逃げ込んだといわれる吉祥院は不動院から西の方に7〜800m程離れた場所にあります。高台の不動院からは下って行かねばなりません。この下り坂の途中に「へっぴり坂」があると思われれます。また天海はこの寺の空井戸の中に身を隠して難を逃れたといわれていますがこの空井戸は今はなく、石仏と並んで「慈眼井」と彫られた石碑がおかれています。慈眼というのは天海僧正が慈眼大師のことです。

さて、この話の時代背景を少し知りたいと思いついてみました。

江戸崎の町は戦国時代末期まで200年に亘って美濃国に勢力を張った土岐氏の一族が（家紋・桔梗）治めておりました。明智光秀もこの美濃土岐氏の一族です。

一方会津では三浦氏族の芦名氏が周りからの脅威にさらされながらもなんとか城を守ってきたのですが、側室を持たなかったり嫡男がいなかったり、幼くして家督を相続した男子が病気で死んでしまったりと不運も続き、そこに常陸国の佐竹義

重が二男(義広)を芦名家の娘と縁組させ(一旦は白河市氏の養子となりそこから縁組)養子となり芦名家の家督を相続したのです。しかしこの時の義広はまだ12歳くらいで芦名家の家臣たちの掌握はうまくいっていなかったようです。14歳くらいの時に、会津を狙っていた伊達政宗の攻撃を受けて大敗し、芦名義広はわずかな家臣を伴って父(佐竹義重)を頼って常陸国に逃げ出しました。家臣の多くはこれに従わず本場にわずか人数だったようです。しかし常陸国では佐竹氏が、秀吉より常陸国の統一を任され破竹の勢いで群雄たちを退けていました。そしてこの江戸崎の地も佐竹氏の攻撃を受けて天正18年5月に滅びます。常陸府中(石岡)の大掾(だいにじょう)氏が滅びる半年前です。

常陸国にやってきた義広は秀吉の小田原攻め後に竜ヶ崎4万石とこの江戸崎4万5千石を与えられ江戸崎にやってきました。そしてほぼ10年後に佐竹氏が家康の命で秋田(出羽)に移封となるとこの芦名義広も秋田に移ります。その後秋田では角館の町を整えて現在にもその存在感を残していますので会津時代やこの江戸崎時代はまだ若すぎたのでしょうか。江戸崎の川沿いの洪水対策などをよく学んだ結果だと思えます。義広は角館では名前を芦名義勝に改めています。しかしその後は嫡男が22歳で死に、側室の子が後を継ぐがこれも早死にし、その子(千鶴丸)も4歳で死亡して芦名家も滅びてしまいました。

さて時代背景が少し理解されてからこのへっぴり坂の話を考えてみましょう。一般にはこのような絶大な権力を得た人物について一見情けないようなこんな逸話が残されているのはどうしてなの

だろうかという疑問がわきます。天海ともあろう有名な修行を積んだ僧侶が、なぜ逃げ出したのか?

石岡の板敷山の麓にある大覚寺には「親鸞法難の遺跡」という碑が置かれています。山伏弁円が親鸞の名声を妬み、板敷山で親鸞を襲おうと待ち構えていました。

しかし親鸞がいつまでたってもやってこないのが稲田の草庵に押しかけます。親鸞は穏やかな話し方で弁円を諭し、その姿に弁円は親鸞の弟子になります。そして親鸞と布教に出かけていくのですが、ある日この板敷峠の道を二人で通った時に弁円はハラハラと涙を落とし一句詠みました。

「山も山 道も昔にかわらねど」

変わり果てたるわが心かな」

今では弁円懺悔の地と石碑が立てられています。でもこの天海の話は超人的な力を發揮した人とは思えないあまりに人間的ですね。そこで私はこの逸話が頭から離れなくなりました。

約200年続いた「土岐の殿さま」への思慕があり、新たにその土岐氏を滅ぼした佐竹派の「芦名氏」が連れてきた随風(後の天海)を快く思っていない人がかなりいたのかもしれない。私のある石岡の大掾氏も「国香の城のお殿様」と慕われていたのかもしれない。その後江戸崎と同じように10年ほど佐竹氏の支配を受けますがやはり秋田に転封となります。このことを当時喜んだものもたくさんいたのかもしれませんが、でももう40年以上前のことですから今ではこのようなお話から推察するしかありません。石岡には「残念坂」の逸話がありますがへっぴり坂とはまた話のニュアンスが違います。

おもわず「屁」をしてしまったという「へっぴり坂」って何か面白くありませんか?

全国の「へっぴり坂」やそれに類似の名前の坂を調べてみました。

(1) 屁つぷり坂: 神奈川県三浦市: 北原白秋ゆかりの坂、源頼朝を村人がこの坂上から拝んだ。

「屁の神を 赤き旗立て祭れるところ」(自秋)

この三浦市は三浦氏が治めていたところで、この三浦氏の親族が会津に渡り芦名氏を興す。その芦名氏は伊達政宗に攻められて江戸崎に入る。

(2) へっぴり坂: 神奈川県横須賀市芦名: 前の三浦氏から分かれた氏族で同じ芦名氏を名乗っている氏族がいたところ。このあたりでは最も急な坂だそうです。

(3) 屁つぷり坂: 新潟県赤塚: 寛延4年(1751)に開通した坂、江戸時代、あまりの急斜面で切な屁(せつなべ)が出るほどであったため、この名前で呼ばれている。地元で、この坂を觀光に看板を出そうとして坂のそばの人に反対された。その人いわく「今までこの名前の坂のそばだったのでどれだけ馬鹿にされて呼ばれたのか。こんな名前はやめてくれ」:

(4) へっぴり坂: 金谷から掛川の東海道: 徳川家康が戦いに敗れ、敵に追われてこの坂を越える時、「セツナ屁」を放ったのでこう呼ぶようになった。「兵放ち坂」が訛って呼ばれたとも。

(5) へっぴり坂: 常陸太宮市大山愛宕山: 室町時代に石塚氏、木場氏が組んで大山氏を愛宕山に追い込み下から火を放ちました。しかし火防の神を祀る愛宕山により火は山の上から下に向かって吹き荒れます。小場の坂まで逃げもどつ

た兵士たちは、ここで追ってきた大山方に最後つべを放ちました。

(6) へっぴり坂・栃木県益子：お殿様がこの坂が急すぎて馬では登れず、徒歩ではあはあ言いながら登っていたそうです。そして殿様が通り過ぎるのを平伏して待っていたら、お殿様「御屁」をぶっ放したそうで、その音が遠くまで響き渡るくらい大きかったそう。

(7) へっぴり坂・東京都多摩市聖蹟桜ヶ丘：急な坂で屁が出るほどだそうで、「へっぴり坂でへをしって 百草、倉沢暗やんで 耕地、落川粉が降る」なんて歌まで残るという。

その他、

- ・へっぴり坂・保土ヶ谷区月見台、神奈川県海老名市、厚木市など
 - ・屁っぷり坂・千葉県流山市
 - ・屁っぴり坂・伊勢原大山街道
 - ・幣振坂（へいふりさか）・長崎県筑後町
 - ・屈振坂遺跡（へっぷりさか）・新潟県柏崎市
- などがありました。

この呼び名は、主に街道の道が多いようですが、昔は馬では登れず滑るような急坂のため「へっぴり腰」で登らざるを得ない坂をいつの間にか「へっぴり坂」と呼ばれるようになったものか、「兵振り坂」から来たものかはよくわかりませんが、権力者である殿様などが屁をしたなどと、いつの間にか面白半分には伝えたたわいもない話だったのかもしれない。

しかし「私たちの最後つ屁」とか「たぬきのせつなつ屁」などという言葉も残るようにたぬき

やイタチなどが追いつめられると最後の抵抗に屁をするともいいます。このような言葉もこの

「へっぴり坂」と関係があるのかもしれない。娯楽も無い時代ですのでこんな話をして憂さ晴らしもあつたのだと思います。茨城にやってきた頃は茨城訛りに「・・・だっぺ」という言葉をよく耳にしました。どこか似たような言葉ですね。

欲張り婆さんの休日

伊東弓子

時々、自分の力以上に遣っている事が多すぎるようだと思いつつも、使命感のように自分に言い聞かせ遣っている。それが苦しめる結果を招いているのも事実だ。忙しい婆さんが安らぎを求めて出かける事を決心した。勿論、後になってのしわ寄せは目に見えているが、それは知らぬ風をしておこう。現実からの脱出だ。

「鉛筆削りの小刀ないよね」「はさみないよね」と前回の失敗を繰り返さないように二人が言ってくれる。又軽い物をトランクに入れ、重い物は機内に二人で持つていくと言ってくれる。その優しさと力には脱帽だった。日常生活でぎくしゃくしている三人の珍道中が始まった。楽しい旅が出来るよう、欲を張らず孫達に合わせるよう。

関東地方は雲に包まれて見えないが、富士の山は雲から頭が突き出していた。薄汚れている様な雲の色が反映してか、富士山も薄汚れて見える。朝鮮半島はよく見える。歴史を作ってきた人や動物の足跡を追っていく。午後の便だから陽を追うように行く。西方浄土へ行く時はこの様に静かに、

ギター文化館

2015 CONCERT SERIES

- 2月11日（水）デュオ・メリス・ギターリサイタル
- 3月1日（日）森万由美アルパ・コンサート
- 3月22日（日）ウーマン・オブ・ザ・ワールド
- 4月5日（日）大萩康一&小沼ようすけ
- 5月3日（日）ギター文化館所蔵名器コンサート
- 5月30日（土）國松竜次ギターリサイタル
- 6月14日（日）高橋竹童津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

下を見たり、あちこち見渡しながら西を目指すの
だろうと思う。

皆が待っていてくれた。一息ついたのも束の間、
午後ソウルに向かうことになった。金曜日の夕方
ということもあってか、車は増える一方だった。
一歩間違ったら大惨事になりかねないようだ。が
真剣に運転している娘には申し訳ない、考え方を
変えて光の流れを楽しんで行くことにした。

ソウルに向かうオレンジ色の流れは、津波が坂
を駆け上がるようだ。ソウル方面からの白い光
が洪水の如く下ってくるようだ。大分長い間続
いた。娘よご苦労さま。

やっと手足を伸ばして寛げる所に着いた。土、
日の利用者が多い宿泊施設だった。寝る所も、風
呂も食堂も広い部屋だった。心も体もゆっくりし
たのだろう、ぐっすり寝入った。

ソウルでの一日目、世界四大聖人に合った。釈
迦、キリスト、マホメッドの大きな像と、孔子の
台には開かれた本が載っていた。どういう意味か
分からないが、聖人とよばれる人を称えているの
だろう。私も日々努力して生きていこう。

二日目は に向った。途中大通りに世宗大
王の像があった。ハングル文字を作った王で「根
の深い樹」のドラマの主人公だったので、親近感
が伝わり壺万ウオン札を広げて眺めてみた。日本
語で案内してくれる時間に間に合ってよかった。
王室を維持していく代々の王や側近達の恩惑、庶
民の生活、近隣の国との関係などなど偲ばれる。
自然の地形をうまく使った智慧の固まりのような
一つ一つだ。科挙の試験をした場所、養蚕をした
所、最後の王の建物、オンドルの話しも箇所を見
ながら説明してくれた。近代化した園圃の都市の

影響で風の流れが変わったり、百年以上のどんぐ
りが枯れたりしていた。昔の朝鮮の人間気どりで
案内について行ったが、若さのなくなった婆さん
には記憶していくのが難しかった。

ソウルでの楽しい時間を体全体で受けて、返っ
て来たのに何か起きそうな予感がした。子供達と
コミュニケーションが上手くとれない日が多かつ
た。遊びは子供同士の遊びに任せ、口出しをしな
いよう心掛け仕事をしていたが必要があつて声を
かけても日本語の出来る二人は無視して、赤ん坊
は泣くし、四人はマイペースであつた。子供達も
数が多くなると強い。群集心理であろう。おさま
りがつかない。子供による婆さん虐めじやないか
と僻んでいた。とうとう娘が病院に行った日、爆
発してしまった。その揚句、罰があたつて左足を
痛め座るのは勿論難しく寝いても痛みがしくし
くと続いた。大人しく静かにしていたが、恥ずか
しく言えない辛い休日になった。こんな淋しさを
胸にして床に入つて寝る毎日だった。

ある明け方のこと、ふうつと目が覚めた時、目
の前に山並みの情景を見た。れんぎよの花盛りの
山、雪を頂く峰、山つつじの花がちらちら咲く山、
若葉の萌える山並み、蝉時雨も聞えてきそうな深
緑の森、霧に包まれた尾根、山路をうめつくし、
全体が燃えている紅葉の山、雨に濡れた森を空の
青さが覆っているような峰、そこにひよっこりと
立っておられる阿弥陀さま。髪も薄くくりくり頭
のお姿、私は首を上げてみた。するとにっこりと
笑った。私が目を覚ましたのに気がついて手を出
してくれた。ああ「山越の阿弥陀さま」誰も知ら
ない二人だけの時間。それぞれの山々はまだ深い
眠り。阿弥陀さまは幾つもの山を登り降りしなが

ら、一番大きい峰に辿りついてオンマを起こし始
めた。それは十ヶ月になったばかりの可愛い東姫
(トンヒー)だった。何て言い表したらいいかわ
からないひとときだった。

その後はまた心安らいで大晦日をむかえる。日
本の家族や寺のこと、日本のこと考えながらテレ
ビを見ていた。映画界で活躍した人達の紹介や表
彰式をしていた。その中カウントダウンの声と共
に除夜の鐘がなり響いた。ソウルの大きな寺の鐘を
突いている。始めはソウルの市長さんだった。い
よいよ新しい年をむかえる。

2015年の明けは一段と寒さが厳しかった。
午前中霧に覆われているチュンジュが、今朝は霧
もなく南山の峰から陽が出てきた。自然に手を合
わせ、今年の健康を願っている私だった。柳さん
が映画に誘ってくれた。映画なんて何年ぶりだろ
う。「あなた！川を越えないでください」というド
キュメント映画だった。

泣けて泣けて初めから終わりまで、涙が止まら
なかった。主人との別れを重ねていたのでろうか。
八十年代後半の妻と九十年代後半の夫の他愛ない日々
の出来事や、二人で暮らす山里の生活、自然の様
子、親子関係、都会と田舎の有りようが描かれて
いた。残った者がどう生きていくか、私にも身に
つまされる思いで観ていた。

よい元日の後、訃報があつて出かけることにな
った。叔父さんの葬儀である。儒教の式で行われ
た孫もみんなでご馳走になった。「いっぱい食べて
ね」と言われて、子供達は本当によくよばれてい
た。親戚の人も多く娘も仲間に入って話が弾んで
いた。みんなに大事にされている様子がよくわか
つて安心した。次の日は叔母の姑さんが二か月前

に亡くなっていたので、そのおまいりだった。

行く時通った川は淀んで暗い感じで、川沿いに栄えた町の今のようだ。大きな倉庫が目に入ってきた。その時代の品々を扱う骨董屋が立ち並んでいたが、客の足はなかった。古い海道が土、日曜には車で一杯になるそうだ。帰りはスポーツ公園の傍を行った。川は今朝とは違って夕陽を映して明るい流れになっていた。太陽と入れ替わりに十日月が光っている。

日本軍との戦いがあった所も見て帰った。出かける時必ず歴史やその土地の生活を語り、見せてくれるのが嬉しい。叔父さんが主人の命日を偲んで焼酎をご馳走してくれたのをいただいたのを切っ掛けに、胃が悲鳴をあげていた。夜はお湯を飲みながら、ここ二、三日の中に合った人、一人一人を思っていた。朝鮮から韓国への移り変わりの中で支え合って生きてきた人達の心に、少しでも寄り添う機会をもてたことを、心に止めた。娘が「今日は日本の爺ちゃんが亡くなった日だから」と七人を集めて話を祈っているのを、遠くに聞いていた。その後粗食を続け元氣を取り戻していった。

帰りの道中、私は呪わしい二つのことを胸に秘め、元氣な風をしていた。二人はスイッチを切り替え足どりも軽そうだ。欲張り婆さんの休暇もあつという間に過ぎてしまった。又欲張りながら背負いきれない荷を、引きずりながら行くのだから。零れた荷物を他人に拾わすことがないようにして欲しいと思っている人もいるだろう。

今回いただいた休日ありがとう。まわりの人のお蔭ですと、思いながら心の中で「今度の休日はいつになるかな」と待たれる気持ちも嘘ではない。

国指定文化財

兼平智恵子

一九五〇年(昭和二五)文化財保護法が制定公布され、文化活動によってつくりだされた文化財は重要なものは国が指定し、保護することが出来ることと規定しました。更に社会情勢などの移り代わりにより一九七五年には同法に大改正がなされ新たな文化財の保護策が拡がりました。ここで大改正された文化財の体系を紹介します。

① 有形文化財：建造物、絵画、彫刻、工芸品、書籍典籍、古文書その他の有形の文化的所産で歴史、上又は芸術上価値の高いもの、及び考古資料、そして学術上価値の高い歴史資料。

② 無形文化財：演劇、音楽、工芸技術等歴史上、芸術上価値の高いもの。

③ 民俗文化財：衣食住、生業、信仰、年中行事などに関する風俗慣習、民俗芸能およびこれに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件。

④ 記念物：貝塚、古墳、都城跡、旧宅その他の遺跡で、歴史上または学術上価値の高いもの、橋梁、溪谷、海浜、山岳その他の名勝地。並びに動物・植物、地質・鉱物で学術上価値の高いもの。

⑤ 伝統的建造物群：宿場町、城下町、農漁村など伝統的な建造物群で価値の高いもの。

⑥ 文化的景観：地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景勝地。棚田、里山、用水路など。

⑦ 文化財の保存技術：文化財の保存に必要な材料や用具の生産製作。修理、修復の技術

など。

⑧ 埋蔵文化財：土地に埋蔵されている文化財。以上のように分類し定義づけている。

①の有形文化財の中で、重要なものは重要文化財。更に世界文化の見地から価値が高く、国民の宝であるものを国宝にしている。

④の記念物には、特に重要なものについては特別史跡、特別名勝、特別天然記念物に指定している。

このようにして日本の文化財は指定制度に基づいて保存されています。

長い間常陸国の政治、経済、文化の中心地として栄えた石岡、私達の祖先が豊かな自然の恵みを受けて懸命に生き、沢山の文化遺産を現代に残してくれました。現在石岡では国指定文化財七件、県指定文化財三七件、市指定文化財七九件、これらの貴重な文化遺産を未来へ引き継いでいかなければなりません。皆さんに知って頂くためにも今回は国指定文化財七件をご紹介します。

(1)善光寺楼門：太田一八八七 国指定有形文化財、建造物 昭和三四年に解体修理を行った際「天文十二年(一五四三)小田大工前島飛驒守建立」の墨書きを発見。室町時代の建築様式の特徴を示す貴重な建造物。昭和五八年一月二六日指定

(2)埴輪男子像：高浜八八〇 国指定有形文化財(考古資料) 全高一三九・九センチ 頭には鍔の広い冠帽を被り、両肩に垂れるほどの長い美豆良を付け首には丸玉を連ねている。衣には胸紐を結び垂らし、腰には二本の帯を締めている。

昭和三四年一月一八日指定

(3)舟塚山古墳：北根本五九七 国指定史跡 全長

一八六m 後円部径九〇m 前方部幅一〇〇m 東国二位 県内最大 陪塚と考えられる円墳から出土し木棺、短甲、直刀、盾などの副葬品や墳形からおよそ五世紀中頃の築造と推定。大正一〇年三月三日指定

(4)佐久良東雄旧宅：浦須三一四―一 長屋門を通ると間口八間半の茅葺の主屋があり広い庭の左側に昔ながらの土蔵がある。一七五一―一七八八の頃に主屋と長屋門が建てられたと思われる。現在の建物も天保五年（一八三四）に一部改築、大小の修理をうけながら今日まで残り民家としての価値も高いと評価されている。昭和一九年三月七日国指定史跡指定。

(5)常陸国府跡：総社一―二七八 国指定史跡 石岡駅から西へ約一キロ 石岡市立石岡小学校敷地内にある。昭和四五年に最初の発掘調査が行われ掘立柱建物跡の柱穴や常陸国分寺跡と同種の瓦が発見された。平成一〇―一八年までの発掘調査で国府中心部、国庁とその西側に位置する曹司の存在が明らかになりました。平成二二年八月五日指定

(6)常陸国分寺 府中五―一 国指定特別史跡、天平一三年（七四一）聖武天皇の勅願により、国分寺創設の詔が下され、鎮護国家・万民息災を祈願して建立された。常時二〇名の僧が居り、「金光明最勝王経」の読経など国家鎮護のための仏教儀礼が行われていた。寺院の財政は封戸五〇戸、水田一〇町歩で賄われていた。寺院全体は東西二七〇m、南北二四〇m 全国の国分寺の中でも大きい方であった。昭和二七年三月二九日指定。

(7)常陸国分尼寺：若松三 国指定特別史跡 天平

一三年聖武天皇の勅願により、鎮護国家を祈るため国ごとに置かれた寺院で、法華滅罪之寺といふ常住の尼僧一〇名、財政は水田一〇町でまかなわれた。一般に国分尼寺は国分寺より早く衰退したらしく不明なものが多く、常陸国分尼寺跡は一線上に中門跡、金堂跡、講堂跡の礎石群が基壇上にあつて保存され、全国的に見ても極めて貴重な遺跡である。昭和二七年三月二九日指定。

茨城国造の墓と推定されている舟塚山古墳、全国唯一、二寺揃つての国指定特別史跡、藤原鎌足の孫藤原宇合も赴任された常陸国府跡、鎌倉時代の建築の風格を善光寺楼門、「徳川の粟は食まず」と断食なされた佐久良東雄、是非先人の息吹を感じてみませんか。

（参考資料・日本大百科全書）

・金色びょうぶ背に おすまし男女山 智恵子

筑波山は男女交際の場

小林幸枝

茨城県謎解き散歩を読んでいたら、筑波山が男女交際の場で合った事が出ていた。

養老年間（七二七―七四二）に成立したと言われている「常陸国風土記」の筑波の条に耀歌という行事が記録されています。花の咲く春と紅葉の秋の年二回、男女が筑波山に登り、飲み食いをし、歌をうたい遊んだといひます。

この耀歌に出て婚約の相手が見つからないで戻ってくるようでは一人前の娘とはいえない」とも

いわれるように、この行事は男女の交際の場であり、結婚相手を見つける場でもあったようです。風土記の記述によるともっと具体的な男女の伝説が残されている。それは、童子女松原という神栖市あたりの海岸に生える二本の松の由来について記したものである。

耀歌で出会った若い男女が一夜を過ごし、気がつくとき太陽が昇っていた。あまりの恥ずかしさのために松の木になってしまったのだという。これは当時の妻問婚という男性が女性を訪れる婚姻形式についての話しによるものと考えられる。

耀歌の行事は一見「性的なもの」と思われがちであるが、男女の求愛を通して豊作祈願への神事としての側面もあった。耀歌の行事は、常陸国ばかりではなく肥前国風土記や万葉集、古事記などにも書かれてある。

実は、ことば座の公演でも、筑波山の耀歌をモチーフにした物語を二話創作し朗読手話舞劇として演じています。

昔は、女性の妊娠・出産は、豊作祈願の象徴的な事として捉えられていたようです。

【風の談話室】

1月25日、田島早苗さんから原稿のメールが入った。1月号へ予定した原稿であつたが、うまく送信できなかったそうである。メール送信も慣れてしまつて何となくこのことのないのであるが、慣れるまではなかなか思つよつに働いてくれない。小生も今は何とか不自由なく送受信できるが、最初の頃は

思つよつに言つたことを聞いてくれなかった。息子が、PCが誤作動を起してしているんじゃないかと聞くと、「そうじゃない親父の操作が悪い」と言われた。そして「PCは好意的に動く訳じゃないから理屈道理に操作しろ」と冷たいことを言われた。風の会の木村さんに教えて貰い、ブログを毎日書いているが、もう600日以上になるのに未だに写真を張り付けることが苦手で、写真なしの味気ないブログになっている。フェイスブックも弟子に言われて始めたが、これにも写真の貼り付けが出来ないでいる。

慣れば簡単ですよと言われるが、そう簡単ではない。田島さんの気持ちはよく理解できる。

頭では便利さがよくわかるが、操作を覚えるのはそう簡単なものではない。しかし、歳を取り足を運ぶ行動が億劫になって来てその範囲が小さくなってくると、ネットの便利さには大いに助けられている。特に東京に行かないと探せないような本などの買い物には大いに助けられている。

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

七十年の軌跡

田島早苗

大寒波襲来の中で迎えた末年、まるで世界平和の困難さを予測するような幕開けとなった。年明けと共に羊一色のマスメディア、お蔭で羊に対する認識も深まった気がする。

羊は群れて暮らすおとなしい家畜で、平和の象徴とされ、とても臆病だとか。古代中国では羊は良きものと言う意味を持ち、漢字にも善、様、洋、養、祥、色々使われている。ギクシヤクしている

中国との関係も、羊の平和にあやかり改善できる年にしたいたいものだ。

ところで、わが家では流感や所用で来られない人が三人居て、何と無く盛り上がりがない年越しになった。それに加えて、体力の衰えも考えず、餅も御節も手作りにこだわった私は、痛む背中を騙しだまし、孤軍奮闘してすっかり疲れ果ててしまった。

笑顔を忘れた我が家の太陽は曇りっ放し。子供や孫にはごめんねと心の中で謝ってばかりの大晦日だった。新年早々家族旅行の時のビデオを見せられ、あまりの婆顔に情けなくなってしまう。「この写真は見たくない」と言えば「それが現実見たまんま」と切り返されてしよげかえっている単細胞の私。

⑨テレで放映された二千五十年完成をめざし開発が進められている宇宙エレベーターの話は新春に相応しい夢のあるニュースだった。三万六千キロの静止軌道の基地から上下にケーブルを伸ばし、そのケーブルの強化を図るため、何回も繰り返される鋼渡し、私の乏しい知識では想像すらできない夢のまた夢。真面目に実現へ向けて研究を続けている人の確信に満ちた明るい顔を見乍ら「あの世から応援しているからね」と呟くばかり。今年には戦後七十年の節目を迎え、各地で戦災の記憶を風化させずに次の世代に語り継ごうという取り組みが始まっている。軍人の遺族恩給はあっても、空襲で亡くなった人には何の保証もなかったという遺族会が開かれたというニュースを見乍ら、防空壕の中で蒸し焼きになって爆死した母方の祖父を思い出してしまった。

広島、長崎の原爆は言うに及ばず、日本全土で

繰り広げられた地獄絵図、失われた命を悼む心をバネに見事に立ち直り、発展を続けた日本魂を若い世代に引き継いでほしいと願うばかり。

美浦村の中で活動している多くの団体の中に、「美浦の女性活動を未来に繋ぐ会・結」が有る。メンバーは女性ばかりで一貫して平和の大切さを学び活動に繋げている。

戦後六十年の節目に「美浦平和のつどい」と銘打って、私たち仲間が舞台で「戦争の体験」を語り人形劇に託して優しさと協調の大切さを伝える機会を持った。そしてメインの立体講談「はだしのゲン」。神田香織さんは、『ヒロシマ・ナガサキ』『命の平等』を声高に訴え続ける活動をしている講談師で、その熱演は素晴らしく、来館者に大きな感銘を与えることが出来た。ロビーでは戦時中の暮らしを思うコーナーを作り、戦中の食べ物「すいとん・麦ご飯」を振る舞ったり(と言っても戦中派の私から見れば、こんな美味しいすいとんではなかったと思う味付けだった)戦中の服装や思い出の品を展示して、村中挙げての大イベントとなった。

五年後の「美浦平和のつどい」は平和を語り継ぐ「夏の会」の女優六名をお招きして「夏の雲は忘れない」の朗読劇の公演を行うことが出来た。村の子供たちも参加した舞台は、いつまでも胸に残る夏の思い出になった。

その後沖繩ツアーで基地の現状を見つめ最後の激戦地や墓碑の公園に涙しながら平和の有難さを噛みしめたり、戦争体験の聞き取りをまとめたり、時には東日本大震災の復興を願う応援ツアーで被災地の現状に胸を詰まらせながら一掬を投げたりもした。

そして迎える戦後七十年の節目になる今年。五年毎に行ってきた大きなイベントを何にしようかと会合が持たれた。最年長者の私は、すべて若い人にお任せの態度で何の役にも立たない。お手伝いはするが先頭に立って皆を引っ張っていく気がない。老いの悲哀を噛みしめるばかり。

ところで「陸平をヨイシヨする会」も二十年の節目を迎える。対外的な評価とは裏腹に、会員の高齢化が進み、存続の危機も囁かれているのが現状だ。しかし何かイベントを行う時の団結力は健在で、思わぬ力を発揮する。

特に若い人の行動力は素晴らしく、縄文広場の片隅に「陸平よはるかに」の歌碑が建立されることになり、寄付を募ることから石の選定まで着々と進み、三月二十七日に除幕式を行うことが出来る運びになっている。

陸平をヨイシヨする会が発足した時村長をさっていた市川紀行氏が作詞され、小学校の教諭だった高橋美恵子さんの作曲による「陸平よはるかはに」はイベントの度に歌い継がれ、ヨイシヨする会のテーマ曲として定着している。二十周年を記念する事業として相応しいと始まった当初は危惧された寄付金のハードルを見事クリアした若いメンバーの力に脱帽。

昔戦争を知らない子供たちをテーマにした歌が流行ったことがある。今では戦争どころか、苦勞の苦の字も知らない子供が増えている。その反面虐待をうけたり、貧困に喘ぐ子供も居て、社会の歪に心寒くなるような日が続いている。日本の行く末を案じる老いの繰り言はなんの力も持たないが、此の俣では駄目だという若い人の底力に期待したい。

(実は一月五日に原稿を送ったと思っていたらまたまた新年早々のポカをやってしまったって届いていなかった。だいぶ加筆の末、改めて挑戦することになったが、何とも心もとない話。上手くいったらご喝采を：)

《読者投稿》

養生日記(詩二編)

『心の色』

堀江実穂

私の心はいつも違う色
悲しい色の時もあれば
嬉しい色の時もある
心は模様

風が吹き抜けて私色を染めていく
朝、期待という色が私の目を覚ます
今日はどんな色に染められるのだろうか
昨日とは違う今日の色
大切にしたい
人を愛する心の色
人を憎む心の色
人をうらやむ心の色
どの色も私には大切な心の色
生きている証の色
前を向いて歩いている心の色

『胎動』

君は何処から来たの

海の中でゆっくりゆっくり動いている
私がパタパタ歩く音海の中で聞いているんだね
私を選んでくれて

私の海の中に生まれられてありがとう
私が嬉しい時も
私が悲しい時も

私が喜んでいる時も

私が起っている時も

私の海の中で何時も一緒に笑っていた

私が風に笑っている時

君も海の中に一緒に笑っていた

君は海の中で元気に大暴れしたとき

私は波の打ち鳴らす

嬉しいリズムに心が踊っていた

君が母の海から陸に上がってきたら

手を繋いで踊ろう

堀江さんには、養生日記として日々心に思うこと
感じることを、心の説明ではなく心の模様として
言葉に落していくといひです。よとお話していま
すが、このまま長く続けて頂けたらと思っております。
詩を書くのではなく時々を言葉に落して行くこと
で、人の心に響く詩になつていくだろうと思つてい
ます。

《二つば座だより》

もっと朗読を楽しもう

白井啓治

最近朗読を楽しむ人たちが増えて来たという。
カラオケが出現し、誰もがバンド演奏を従えて歌

うことが出来るようになり、今ではカラオケで歌ったことがない人というのはごくごく少数であろう。カラオケルームへ行けば、誰に気兼ねする事もなくスター気分を満喫することが出来る。

このカラオケの浸透に曳かれてという訳ではないだろうが、より高度に、自由に自己表現をしてみたいと考える人が増えてきたのか、朗読人口が増えてきた事は嬉しいことである。

住宅街の喫茶店やレストランでの朗読ライブなども随分と増えている様である。表現としての朗読には、こう読まなければならぬ、という決められた型というものがなく、自分の好きな詩や物語を借りて自分自身を自由に表現できるところに、楽しみの奥深さがあると云える。

かつては朗読というラジオ・ドラマのジャンルかのように思われていたが、実際には声による一人演劇と考えて貰うといいだろう。

選択した物語や詩をかりて何を表現するかを決めて、それを読む俳優の人物設定をし、自分の表現劇として演じていくのが朗読なのである。

表現の自由さ幅の広さなどが、いま朗読を楽しむもうという人達の層を広げているのだろうと思う。表現の自由さ幅の広さについて少し説明すると朗読とは、表現された言葉を単に読むのではなく言葉を音に変えて伝え、その言葉の音に秘められている心模様を肉体の揺れる風を起こして見せるという変幻自在のパフォーマンスであると言える。

実際、演劇というジャンルの中で、朗読ほど自由で自在な演劇はないだろうと思う。何故もっと広がって行かないのだろうかと思議に思っていたのであるが、最近になってようやくその魅力に気づいてもらえるようになってきたのか、と大い

に喜んでいる。

ことば座では朗読手話舞という新しい表現を行っているのであるが、朗読手話舞とは朗読の有する変幻自在性と手話に舞踏のもつ変幻自在性を与えて、音の風と風の姿を創り上げていこうという舞台表現である。

朗読は、自分だけの、自分にしかできない表現を創造することの出来る芸術活動であるということが出来る。

今年少し朗読表現そのものに少し力を入れた活動も展開させてみたいと考えているところであるが、プロ(表現者)としてのスキルを身に着けた人材の育成がまず先かなとも思っている。

俳優としての最終的、究極的エゴ表現は朗読にあるのではないだろうか。それ程、朗読は突き詰める面白さのものと言えよう。

《一寸一言・もう一言》

一寸一言

怪しげな税

打田昇三

何処の国とは言わないが、消費税を上げる目的だけで数百億円の予算を掛けて、結果が分かり切った選挙をした国が有った。それに比べて実に手軽で経費も掛けずに税を取る国が有ったので紹介をしておく。増税の参考にして貰いたい。

長距離バスの旅を続ける際に一時停止するのは交差点と踏切ぐらいである。したがって大都会を抜けて、余り人も居ないような場所でも交差点でも無いのに一時停止をすれば、何か有ったのか

と居眠りをしかけていた乗客も外を見る。

すると、信号機も無く交通警察官も居ない道路に長い竹を持った男が立っていて、運転手の指示を受けた助手から幾らかの金を受け取り、おもむろに竹を除けてくれた。それが青信号らしい。

つまり、何もない道路に変なオジサンが居て私設？信号機を設置し、通過する車から料金だか税金だかを徴収していたのである。其の国の道路交通法に、私設信号機の設置が認められていとも思えないが、その行為は公然と行われていてバスの運転手も当然のように通過料を支払う。其の道路が私道ならば仕方がないが、大都会から延々と続く広い道であるから個人の土地とは思えない。

そのバスは座席ごとに小型扇風機が設置されている完全冷房車であったが道路が凹凸で揺れる度に乗客は扇風機に頭をぶつけていた。竹の信号機は、それを軽減する安全策だったかも知れない。

太陽は西から昇る

菅原茂美

金星は「明けの明星」「宵の明星」と呼ばれ、それぞれ3時間ほど輝く。ラテン語で「ヴィーナス」(美し愛の女神)、中国で「太白」、アイヌ神話では「雪女」、枕草子では「よばひ星」とある。金星は太陽と月を除けば、天空で一番明るく、マイナス⁴等星。オーストラリアの砂漠では、金星の明かりで自分の立った影が写るといふ。釈迦は明けの明星の輝きを見て「真理」を見つけ、マヤ文明は金星を「戦争の守護神」としたという。

金星は地球のお隣さん。地球の姉妹星と言われ、地球を1とすると金星は赤道半径0.95、体積

0.85、質量^{0.8}、重力^{0.9}。非常に地球に似ているが決定的に違う面もある。まず公転の1年(地球の224日)より自転の1日(同243日)の方が長い。そして地球の地軸は公転軌道面に対し、23.5度傾いているため、四季があるが、金星のそれは178度の傾きのため完全垂直倒立し、他の惑星と逆方向の回転をし、太陽は西から昇り東に沈む。なぜ金星のみが逆転したかその理由は、誕生は地球と同じ46億年前だが、その頃、他の大きな天体が衝突してきて、自転軸をひっくり返した結果と考えられている。金星の大気は、CO₂が96%、窒素が3.5%のため、温室効果が甚だしく雲は殆ど硫酸である。表面温度は464℃で、90気圧(地球の水深900mに相当)である。

地球大気も当初のCO₂は金星並であったが、生物が誕生、同化作用でCO₂を海中で吸収し、炭酸塩として岩石に固定化したため、現状に落付いた。化石燃料を燃やしたCO₂が温暖化をもたらし、破滅的な未来を招く恐れが高い事は、金星の実情を見ればすぐ分かる。温暖化ガスの脅威を軽視する学者もいるが、とんでもない事である。

もう一言

選ばれし者

打田昇三

何年か前のこと、何処かのスーパーの旦那が知らない間に国会議員にされて驚いた!というニュースがあった。「比例代表制」とかいふ選挙制度の被害?に遭ったらしい。国会議員は慎重に選んで貰わないと困るのだが、室町時代にも安易な人選で失敗した事例があるので紹介して置く。

室町幕府第五代將軍の足利義量は大酒飲みで早死したため、先代の兄弟など四人の候補から將軍後継者が抽選で選ばれた。当選したのは天台宗の名門「栗田御所」と呼ばれた青連院の門跡(二門の法脈を継承する寺院の主僧)義円である。お経の他は知らないのに、政界・武家社会のトップに据えられてしまった義円は足利義教(あしががよしのり)と改名し第六代將軍に収まった。

初めは落ち着かなかった此の俄か將軍は、その中に將軍の何たるかを知ると世にも恐ろしい独裁者になっていき、鎌倉府を滅ぼすなど弾圧を繰り返し、遂に部下に暗殺されてしまう。

石岡(府中城)に居た大掾氏も鎌倉府滅亡で衰退が始まったのであるから、此の俄か將軍に潰されたようなものである。室町時代の関東で「八族八館」と称された武將があり、千葉・宇都宮・小山・那須・結城・佐竹・小田・長沼が挙げられるが残念ながら大掾氏は入っていない。

「平均寿命」と「大還暦」

菅原茂美

平均寿命とはゼロ歳児の余命の事である。具体的計算法は、各年齢の年間死亡率を求め、今年生まれた人口が、この死亡率に従って毎年どれだけ死亡するかを求めて計測。平均寿命は一般的に先進国で長く、発展途上国は乳幼児死亡率が高いため短い。日本は2010年、国連発表で世界一位(82.73歳)。次いでスイス、香港、オーストラリア、イタリアの順である。そして最短は、シエラレオネ、スワジランドが共に37歳である。

歴史上、生没明確な世界最長寿者はフランスの

女性ジャンヌ・カルマンで、122歳164日(1875.2.21-1997.8.4)であった。大還暦(120歳)を超えた人は世界で彼女一人である。家族も長寿で、兄97歳、父92歳、母86歳であった。カルマンは100歳超えても自転車を乗り回し、週に1kgのチョコレートを食べ、タバコは20〜117歳の間吸い続けたという。日本の泉重千代さんが享年120歳と言われたが、10歳上の兄が亡くなった戸籍にそのまま重千代さんを入れ替えた事が分かり、ギネスブックから削除。

人間の寿命は染色体の後に付くテロメアが細胞分裂する度に減少し、大還暦を過ぎると大方、細胞分裂は停止し死亡する。という事は大還暦までは生きる可能性有り。

アユの寿命は河川では1年魚だが、海水なら2年以上も生きるし、植物の1年草も条件が良く開花・結実すれば1年だが、環境悪く花も咲かなければ何年も生きる。

人間の寿命も栄養・医療等が良ければ比較的延びるが、さて、その政策やいかに?

一寸一言・もう一言の「コーナー」を設けた所、打田兄菅原兄が日記代わりに毎月送ってくれる。4000字詰め原稿用紙一枚半程度の文なので、気楽に一言書くのがいいらしい。

構えず気楽に一寸書くのは良いものである。気付いたこと、思いついたことを一寸そのまま書くことは、他人から不信がられない独り言なので、精神衛生上大変いいことではないだろうか。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第二 (四)

古代中国の諺に「鼓腹撃壤（こぶくげきじょう）」というのがある。このシリーズの「烽火之沙汰」で登場して貰った「笑わない女・褒似」の時代よりも更に古く世界四大文明の一つである黄河文明に属する頃に「その仁は天の如く、その知は神の如く…」と言われた皇帝が居り、黄河流域に都を定めて五十年に及んだけれども、民が己の政治に満足しているかどうか分らず、それを確かめる為に姿を変えて町に出て見た。町で子供が歌う「♪…万民が無事に暮らせるのは天子の徳によるものです…」その傍らでは満腹の老人が腹を叩き足で大地（壤）を撃ち（踏み）ながら歌い踊る。

「♪…日が昇れば野良で働き、日が沈めば家に帰る。水が欲しけりや井戸を掘り、田を耕して米を得る。天子のお陰など俺達には関係ないさ…」

つい近年まで日本でも信仰されていた漢方医薬の神様である「神農さん」などと共に理想の天子とされる「堯・舜（ぎょう・しん）」二代の皇帝と、堯王の父である「帝嚳（ていこく）」の時代には政治の恩恵が万民に行き渡り国民が満足をしていたと伝えられる。余計なことを言う現代の中国では考えられないが…偏屈な爺さんの歌を聴いた皇帝は西暦紀元前二千四、五百年頃（有史以前）に理想的な「上古の治」を実現した「堯」のことらしい。子供は正直であり、偏屈な爺さんが満腹で踊れるのは社会の安定と豊饒を意味する。

然し、其の時代から三千数百年を経過した日本で

は、朝廷と其れに寄生する公家、豪族など一部の者が富と権力を独占しており無力な人民は「鼓腹撃壤」どころか「空腹激情」の捌け口もない有り様であった。そうした中で支配階級は隙があれば権力の奪い合いを生甲斐としていたようなものであり、西光被斬から始まった反平家運動の挫折と、その後遺症とで痛い目に会う連中が「平家物語」の中では、どの様な形にしても登場人物として採用され歴史的には陽の目を見ることになった。

鹿ヶ谷で「平家打倒」の謀議に参加した後白河法皇を頂点とするメンバーは多田行綱の密告で法皇を除き逮捕されたのであるが平家物語では既に「西光被斬」が出ている。物語編集の都合で前後するのであるが、実際には治承元年（一一七七）六月一日に藤原成親と西光が捕まり、その自白から清盛が法皇の身柄を拘束しようとする。平重盛が其の事で父親に意見をしたのも六月一日、謀反に参加した他のメンバーが捕らえられたのは西光の自白によることなので早くても六月二日以降だと思っていなければ、是も六月一日には一網打尽であったらしいから実に手際が良い。明らかな凶悪犯人の裁判・刑の執行に呆れるほどの歳月を費やす現代日本の法制度は見習うべきである。

そして是から書く「大納言流罪」も六月二日のことになっている。大納言は言うまでも無く平家に近い藤原成親であり、平家打倒の謀議からすれば西光と成親の責任は同等と思われるが、西光は清盛から直接の拷問サービスを受けた上で首を斬られ、成親は叩かれて痛いふりをしてから流罪になった。「良かった！」などと喜んでいられない。結局は藤原成親も流罪の後、一か月と一週間で生きて戻ることが出来ない身になってしまった。

大納言流罪（だいなごんるさい）のこと

密告に依り発覚した「鹿ヶ谷謀議」は、平清盛の心情からすれば許し難い行為であるから関係者の裁判は即決で行われたと思うが、逮捕者が多いので平家物語原本にある六月二日の処分完了は早すぎるような気もする。昭和年代の、いわゆる戦時中に出された歴史年表には治承元年（一一七七）の六月中に「平清盛が藤原師光（西光、藤原成親、平康頼らを斬流に処した…」と書いてあるから、何日かのズレは有ったかも知れないが、事件の被告たちは碌な審理も無しに「善は急げ！」という諺を適当に使われ処罰されてしまったらしい。

平家と親戚関係にあった新大納言成親も平家屋敷に拘留され、清盛の号令でぶん殴られた後に、寝殿内に設けられた客間を仮の公家の座として其処に置かれ特別な御馳走が準備された。待遇が良くなった訳では無くて、流罪（無期懲役刑）執行の前に囚人用特別食が出されたのであるから本人もそれを承知している。お代りして食べるぐらい胆が太ければ良いのだが、成親はあれこれと企むだけの人物であるから、胸が塞がり先行きの不安が重なって箸を持つことも出来ない。

その中に「タイムオーバーです」と無情にも御馳走の膳は下げられてしまった。喰い物の恨みは恐ろしいと言うが此の場合は本人のミスであるから誰も恨めない。入れ替わりに囚人護送車が玄関に到着した。公家が普段に乗っている車と違って牽引する牛も強そうで恐ろしい顔をしている。

地獄行きのようなものであるから乗りたくは無く

てグズグズしていると護送の武士が親切に「早く、早く！」と急きたてる。不本意ながら乗るほかはない。源平盛衰記には「あららかに引きたて、うしろざまに投げ乗せて…」と書いてあるから荷物並みの扱いで丁寧に放り込まれたらしい。その周囲を大勢の軍兵が取り囲んだ。回りに見知った者が居ないかと探してみたのだが誰も居なくて、目に着くのは平家の軍勢ばかりであった。

出発前に「せめて今一度、小松殿（重盛）にお目にかかれませんか？」と頼んでみたのだが清盛の意向が行き渡っているようで誰も返事をしない。自分勝手な藤原成親は「たとい、重い罪で遠国へ流されて行く身でも、誰か一人ぐらいいは供の者が付いていても良いではないか」と護送車の中で嘆き悲しんでいた。警備の武士たちも少しは気の毒に思っただけで、御栄転の際の新幹線ホームと違って此の場合の見送りは難しい。

収容されていた平家屋敷を出た囚人車（平家）と言った藤原成親を乗せた牛車は八条大路を西に進んで行ったので、右側の小窓からは皇居が見える。其処は自分が長年に亘って出仕していた場所なのに、今は余所に見えるのが悲しい。物陰から密かに見送っている成親の家臣たちは下働きの者から牛の飼育係まで涙で袖を絞らない者は居なかった。まして都に残された北の方や幼い子たちの心の内を推し量れば誠に哀れであった。

洛南の鳥羽殿の辺りを過ぎれば、此の御所（鳥羽離宮）に後白河法皇が御出でになられた際には自分がお供に外れたことは一度も無かったことを思い出し、近くには成親が建てていた山荘（守はま殿）と名付けたも有ったのだが、其処も素通りして鳥羽殿南方の門を出た。門を出たところは桂川で其処からは

舟に乗り換えさせられた。同行の武士が船頭に「船足を速くしろ！」と命令したので、成親は「一体、何処へ連れて行かれるのであろうか？」と思ひ、殺されることを覚悟して「どうせ殺されるのであれば、都に近い此の辺りで！」と言ったのは思いつめたことである。

成親は、近くに付き添っている武士に「あなたの名は？」と問えば「難波次郎経遠」と答えた。この武士は藤原成親が清盛に呼び出されて平家屋敷に留め置かれた際に、清盛の命令で成親を叩きのめせ！と言われ「どうか痛そうに喚いてください！」と言つてくれた相手であるから、成親は名前を知って居ても良かったように思うが、其の気配りが出来る人物は、謀反など考えない。

未練が絶ち切れない成親は難波次郎に「近くに私の家中の者が見送りに来ているかも知れない：船に乗らないうちに言い残すことが有るので尋ね出してほしい」と頼んだ。難波次郎は船着場を走り回って人々に声を掛けたのだが「…大納言の見送りに来ました」と言う者は一人も居なかった。これは仕方のないことで、誰も重罪人の知人には成りたくない。特に平清盛に知れたら謀反の仲間にされてしまう懼れがあるから尚更である。

藤原成親は「私が公家の地位に在った時には、従う者が千人、二千人と居たけれども、流罪にされて何処かに連れ去られる此の時に見送る者の一人も居ないことは悲しい…」と涙にくれていた。此の有り様を見て警護の武士たちもさすがに同情したのである―この部分は平家物語の作者も藤原成親を気の毒に思っただけで書いているようだが、現職当時と、失脚して罪人となった身とでは関係者の反応が違うのが当たり前なのである。肩書の無くなった大納言は、小

豆の大納言にも劣る。それに気づかない藤原成親は無分別な行動が示す愚か者であるけれども現代でさえ、OBなのに現役時代と同じよう威張り散らす馬鹿が政治家や官僚などに多いから成親を責められないが…。

成親の愚痴は続く…自分が公家として朝廷にお仕えしていた頃には熊野詣で、天王寺詣で、などと特別仕立ての大型船に乗り、従う船も二、三十艘あって豪華な船旅であったが（贅沢な！）今は怪しい程の粗末な船に簡単な屋形を付けただけで其れに幕を張り巡らせ、従う者は屈強な武士だけという誠に殺風景な船旅で今日を限りに都を離れなければならない。何処へ連れて行かれるのやら浪路遙かに流刑地に連行される心のうちを推し量れば誠に哀れではある。

やがて流人船は其の日のうちに摂津国大物浦（せつこのくに）のうらら兵庫（兵庫）の海岸に到着した。本人はあれこれと愚痴をこぼしているが、藤原成親が流罪になった（流罪で済んだ）のは、小松殿こと平重盛の（清盛に対する）懸命な命乞いがあったからである。清盛の腹積もりでは藤原成親の所業と言うか謀反計画の役割は、主犯の西光に匹敵するもので情状酌量の余地は無かった―この記述に続けて、平家物語原本には藤原成親が中納言であった頃の出来事が書かれている―事件に閑与して流罪になるところ、後白河法皇の配慮で異例の「流罪中止」になった例である。今回も其れを期待したか知れないが、今度ばかりは法皇自身も重盛が止めなければ流される立場である。

今回の事件から八年前の嘉應元年（一一六九）此の年は平清盛が太政大臣を辞めて正二位に叙された年であるが中納言・藤原成親の領地であった美濃国平野庄（大垣市付近）に於いて領主の傲慢ぶりを象徴する

事件が起こった。成親の目代（私的に任命された管理者の右衛門尉正友が酒を飲んでいゝ所へ領民が葛布（葛の織維で織った布）を売りに来た。酔った正友が売り物の布に墨を付けて汚したので、売り手が悪口を言ったところ、主の威光を嵩に目代が乱暴を働いた。売り手は現地に祭祀された日吉神社に奉仕する者であるから黙っていない。数百人が目代の許に押し寄せて、戦闘状態になり、十余人の神人が射殺された。

事件の内容が「巻第一・俊寛沙汰・鶴川軍」に似ているから気になるが：当時は神仏に依存する勢力、朝廷に寄生する勢力、新興武家勢力が競いあつていた時代なので類似の出来事が有つたと解釈して、嘉應元年の十一月三日に比叡山の大衆が蜂起し、国司（目代の雇い主）である藤原成親を流罪に、目代を監獄に入れるようにと要求した。是によつて藤原成親は備中国（岡山県西部）に流されることが決まつた。刑の執行が行われる日に藤原成親は備中国への出発地点である京都西八条まで出て来たところ、使者が来て、後白河法皇の意向により無罪釈放とされてしまったのである。

比叡山の大衆は怒りまくつたけれども、翌年の正月五日には、何と藤原成親は天皇を守護する衛門府の長官に任命され、然も検非違使の別当に任命されたのである。つまり刑務所へ送られる人物が途中で行く先を変更して警察庁へ行き長官になった：それも法皇の意向だけで：当時の日本が法治国家では無く、呆痴国家であつた証拠である。

其の頃、検非違使別当に予定されていた人物は宇多源氏の源資方と藤原兼雅であつた。このうち源資方は公家として古参の年長者であり、藤原兼雅は家柄から当然、其の職に補されるべき人物であつた。それが三流公家の藤原成親に官を奪われたのである。

これは成親が御所の一部を室町に造営して朝廷に進めたからである。そして成親は嘉應三年（一一七一）四月から承安元年には正二位に叙された。この時には序列として藤原道長の系統である中御門中納言家宗を越えての昇進であつた。さらに四年後の安元元年十月二十七日には権中納言から権大納言に上がった。――「賄賂は経歴に勝る」と言う格言が有つても良い。

世間の人々は是を問題にして「山門の大衆（比叡山の神仏）には呪われているのに、地位が上がる！（官職が賄賂で動く）」と軽蔑していた。藤原成親は、その様にして世の中を上手に泳ぎ渡つてきたけれども今は其の所為で重罪人として流されて行く。神仏の当てる罰でも、人の恨みによる呪いも、其の効き目が早いことも有れば遅いこともあつて一様に同じとはいかないのであろう。

治承元年六月三日、藤原成親を収監している船に都から使者が来た――関係者一同が騒然としていた為成親本人は此処で斬られるのか！と覚悟をして周りの武士に其れを訊ねたのだが、此処から船を出して備前の児島へ流すべし！と言う指示だと言われた。都の使者は平重盛の手紙も届けてくれて、それには「何とか都に近い場所に！と努力をしたのだが、それが叶わず、申し訳ないけれども、お命ばかりは何とか助けて貰うようにしました」と書かれていた。重盛は監視役として付き添つている難波次郎にも手紙を充てて「任務に就く間は気を付けて（成親卿にお任せせよ！）」と注意を与えるなど細部に亘る配慮がなされていた。

新大納言・藤原成親は、有難い恩寵を受けた後白河法皇とも離され、束の間も離れ難かつた北の方や幼き子供たちとも別れて「これからは何処へ流される

るのであろう：故郷に帰つて妻子に会うことも二度と叶わぬのであろうか？」と思つてつけても、山門との争いに依つて流罪とされた際には法皇の御配慮に依つて召し返して頂いた。今は見知らぬ国に流されようとしているが、是は法皇の関与された処罰では無い。どうしてこの様なことになるのであろうか？と天を仰ぎ、地に伏して嘆いてみたところでの役に立たない。

此の章段を見るだけでも藤原成親という人物に自分の信念は無く、その場その場で天皇（法皇）や権力者に寄生して自分の欲望を満たすだけの最低男であることが分かる。是を処断する平清盛にも共通する部分はあるが、つまりは愚か者同志の権力争いであるから、藤原成親の話は平家物語に無くても良いように思える。多分、平家物語の作者は仏教界を馬鹿にした仕返しとして藤原成親の因果応報・地獄行きを特別編集したのであろう。

そういう事情であるから、泣いても喚いても無駄であり、藤原成親を乗せた流人船は沿岸部を西に進んで尼ヶ崎港から明石海峡、播磨灘を抜け、流刑地の備前児島（現在の岡山県玉野市）に漕ぎ寄せた。成親は其処で降ろされ、海岸部にボンと置かれた粗末な家に連れて行かれた。其処が臨時の刑務所に充てられたのである。

平家物語原本では「島のならひ、後は山、前は海」と書いてあるが半島であるから環境としては悪くなかつたように思う。「磯の松風波の音、いずれも哀れは尽きせず」であるが、本当に哀れであつたのは、藤原成親がこの地に一か月も居られなかつたことであろう。「何処に行ったのか？」と言えば遠い、遠い所としか言いが無い。其の事に触れた章段が「大納言死去」である。

阿古屋之松（あこやのまつ）のこと

平家物語の良いところなのか欠点なのか判断が分かれると思うが、順序立てて進んできた話に突如として無関係なような挿話が入ることがある。例えば此の章段のように、平家転覆の陰謀に加担したメンバーが次々と重い処分を受ける：罪は罪として当事者が悲嘆にくれる：映画・演劇だと泣かせどころに出て来た「阿古屋之松」とは何なのであるか？どうも話は百七、八十年も遡（さかのぼ）るらしいので、先ずは原本に従って平家転覆に加担したメンバーの受けた刑罰（判決本文）を紹介して置く。

平家に対する反抗が罪になるかどうか、現代の法制度だと疑問であるが、先ず首犯格の西光法師は裁判無しで早々と首を斬られ、同格ながら平重盛に近かった藤原成親は取り敢えず船で流刑地の備前国児島に流されて来た。答えを先に言ってしまったが其処には長く居られなかった。そして息子の藤原成経と僧の俊寛と平康頼は奄美諸島の鬼界島に流され、近江中将こと源成雅は佐渡へ、山城守・中原基兼は伯耆国（鳥取西部）へ、犯人逮捕が仕事の検非違使であったのに捕まった惟宗信房は阿波国へ、同じく平資行は美作国（岡山北部）、式部大夫の藤原正綱は播磨国（兵庫西部）などへ、それぞれ流された。是にて一件落着…。

その頃、入道相国こと平清盛は福原（神戸）の別邸に居たのだが、六月二十日に平家の武士で摂津左衛門盛澄という者を使者として門脇宰相こと平教盛に「思うことが有るので、急ぎ丹波少将を福原へ出頭させるように…」命じた。門脇宰相は良いことでは無いと感じて「…あの時に（最初に呼び出された時に）厳しい処置が下されていたならば致し方無いが、今

になって思いがけないことを命じられたらどうしよう…少将や、其の妻（教盛の娘）を悲しませるのは辛い…」と言いつつも止むを得ないので少将を連れて福原へ出かけた。

見送る女房たちは「清盛公の御赦免は期待できないのであろうか、どうか宰相殿のお言葉添えで助かりますように…」と願うばかりである。宰相も「是までも思い付く限りのことは（清盛に）お願いをした。（今度もその様に努力する）それでも厳しい沙汰が下るならば私も世を捨てるほかは無い。もし、その様になつてしまつたならば何処に居ようとも自分の命の有る限り援助を惜しまない。（父親の成親が流罪となつたので、成経の場合も流罪を想定している）」と言うばかりであった。

丹波少将・藤原成経には今年三歳になる男児があつた。成経本人が未だ若過ぎるので日頃は子供のことも乳母や仕える女房に任せ切りにしていたが、流石に自分の命に保障が無い福原行きであるから心に懸る。「幼い者の顔を今一度、見て置きたい…」と乳母（めのと）に抱いて来させた。その児を膝に乗せ、髪を撫でながら涙を流して「あわれ：是までは汝が七歳になつたならば元服をさせて法皇にお仕えさせようと思つていたが、今は其れを言うことも出来なくなつた。（父親の罪で罰せられないとも限らないが）もし無事であつたならば、僧となり私の後世を弔つて欲しい…」と言えば未だ幼き心にも何かを聞き分けたよううで領（うなず）いてみせた。少将を始め、母君、乳母の女房など、その場に居た人々は情の深い者も、冷静な者も一様に涙で袖を濡らしたのである。

藤原成経一家の涙に関係なく福原から来た清盛の使者は「今夜中に鳥羽まで出て来るように！」と事務的に伝えて来た。それに対して成経の関係者は「鳥

羽迄出ても此の屋敷に居ても、時間的には少ししか違わないのであるから、せめて今夜だけは屋敷に居させてくれても良いではないか…」と言つたのだが、清盛から命令された者は「そうですね！」などと言える立場ではない。壊れたレコードの様に「鳥羽まで！」を繰り返すだけ…。

鳥羽は船の発着場であるから、其の日のうちに都から追放されたことになる。義父である宰相（平教盛）も余りの恨めしさに今回は一緒に行く気力も無くした。結局、六月二十二日に藤原成経は清盛の居る福原へ着いて、そこで瀬尾太郎兼康から清盛の命令で備前国への流罪を宣告された。流刑地まで瀬尾太郎が同行するのである。瀬尾は成経が宰相の婿であることを知っているから、氣を使つて（宰相に言い付けられることを懼れて道中、様々に懇切丁寧な扱いをした。けれども流される成経のほうは、それどころでは無くて夜も昼も、ただただ「南無阿弥陀仏」か「アーメン」か分からない念仏を唱え続けて、何処かに連れて行かれた父親の事を案じ、かつ嘆いていたのである。

心配されていた成親の方は備前児島の海岸部に在る小屋に置かれていたのであるが、監視役の難波次郎経遠が責任感と言うよりも自分の思い込みから「港に近い場所では、万一に脱走でもされては困る」と判断して内陸部に移していた。既に述べたように、平重盛から手紙で「大切に！」と言われていたのであるが、それを拡大解釈して奥地へ移した。其処は現在の岡山市郊外であるから良い場所に移したことにはなるが、岡山が都市化したのは戦国時代らしいから辺鄙な場所であることに変わりはない。藤原成親の新任所は備前国と備中国との境になる庭瀬郷の有木という所で修行の僧侶たちが本山から離れて住

んでいた。その山寺を取り上げて其処に成親を収容したのである。

平家物語は、どうでも良いことをシツコク書いた、肝心なことを抜かして書いてあるのだが、此の場合も息子の藤原成経が流された場所は備中国としか書いて無い。備中国に在った瀬尾太郎の領地に一時的に置かれたらしい。その場所は父親の成親が移動させられた備前国庭瀬郷有木とは僅かに五く六キロしか離れていなかった。或る日、丹波少将成経が有木の方から吹いてくる風を懐かしく感じたのかどうか「此処から大納言殿（父親の成親）が置かれているという有木まではどのくらい道のりであろうか」と瀬尾太郎に聞いた。心の中では「歩いても行けませよ」と答えたのだが、瀬尾は心を鬼にして「片道を行くだけでも十二、三日はかかります」と言った。成経は涙を流して次のように思ったのである——長らくお待たせしたが是からタイトルにある「阿古屋之松」が登場することになる。（こは映画・演劇だと藤原成経の「独白」になる部分である）

——日本は昔、三十三か国であつたけれども（この三十三か国は根拠が無い。六十六か国を単純に二分したものと推定されている）途中から六十六か国に分けられた。成経が流された備前、備中、備後の国も元は一国であつた。また東国で聞く出羽、陸奥の両国も、昔は六十六郡が一国であつたのを陸奥国五十四郡とし、十二郡を分けて出羽国を新設した。その為に、かつて実方中将（さねかたちゅうじょう＝藤原実方）が奥州へ流されたときに、名所の「阿古屋の松」を見ようと国内を尋ね回つたが知っている者が居なかった。

帰り道で一人の老人に出会つたので「貴方は此の土地に詳しい方とお見受けする。此の国の名所で阿古屋の松を御存じか？」と声をかけた。老人は「そ

れは此の国のことでは無く、出羽国のことでしよう」と答えた。実方は「…他国のことならば貴方が御存じ無いのも仕方無いことではあるが、世も末になつて名所が分からなくなるのは寂しい…」と言

いながら去ろうとする、老人が実方を呼び止めて「もしや貴方は、みちのくの阿古屋の松に木（こ）がくれている（出）ずべき月のいでもやらぬか」という歌に依つて、陸奥国の名所・阿古屋の松と言われたのでしよう。それは両国が一国であつたときに詠まれた歌の所為ですが十二郡を分けて出羽国が新設されてからは阿古屋の松と言えは出羽の名所になつていたので「と教えてくれた。それに従つて実方中将も出羽国まで行つて阿古屋の松を見たのである。陸奥国と出羽国が分かれたように九州で筑前・筑後に分かれた筑紫国の太宰府（菅原道真が左遷された役所）から正月に都へ献上する鱸（はらか）にべはらあか、芽出度い魚の使者でも片道十五日と定められていたのに、藤原成経の配所から遠望出来る有木（成親の配所）まで片道十二、三日と監視役が言う。それだけの日数が有れば鎮西（九州）まで行ける。備前と備中との間ならば三日も有れば行き来が出来るのに、近い所を遠いと言うのは大納言（父・藤原成親）の居場所を成経に知らせまいとする為であろう…として、その後は幾ら恋しくとも、有木のことを聞くことはしなかつた——平家物語の記述は是だけであるが平家とは関係が無い実方中将が登場するので話が込み入つてくる。原作者に代わつてお詫びに、平家物語には無い実方中将に関わる話を書いておく。

実方中将こと藤原実方は円融天皇（紫式部が仕えた一条天皇の父帝）時代に左大臣を務めた藤原師尹（ふじわらのもろただ）の孫であり、歌人として和泉式部、赤染衛門などと共に知られた人物である。一条天皇の近

くに仕えていたのであるが或る日、同僚の藤原行成と殿上の間近くで口論となつた。天皇が居るから喧嘩も上品にしなければいけないのに、実方は其れを忘れて相手の冠をムシリ取り庭に投げ捨て勤務を放棄してしまつた。

相手の行成も祖父が摂政太政大臣を務めた藤原師尹（ふじわらのこれただ）であり、書の達人と言われた人物であるが、祖父・父と早逝したので官位は近衛少将までしか昇れずにいたのである。公家が他人の前で冠を脱ぐことは無く、実方の行為は重大な侮辱になるのであるが藤原行成は「無茶な人だな…」と他人事のように言う宮中に勤務する者と呼んで冠を拾わせ、何事も無いように職場に戻つた。自分で拾いに行けば良いのだが形式を重んじる無駄の塊である。宮中では落とした物を公家が自分で拾うことも出来ない。（阿呆）

実はこの出来事を見ていたのが一条天皇であり、藤原行成の態度に感心した。次の人事異動の際に行成は大抜擢で天皇の筆頭秘書官に任命され書の才能も開花したのである。そして藤原実方のほうは「東北地方には歌の勉強になる名勝地が多いから見て参れ！」と言う名目で陸奥守に左遷されてしまつた。阿古屋之松を訪ねたのも陸奥守在任中のことであるが結局、歌人として名高かつた実方中将は、阿古屋之松のエピソードだけを残して東北地方で没したようである。平家物語に採録されただけ良かったと思ふ他は無い。

大納言死去（だいなごんのしきよ）のこと

平家物語を「ひらや物語」と読んで二階建ての立

派なお屋敷には住めない大都会の庶民の話だと思っ
た方が居たとか？桓武平氏の興亡を伝える物語であ
るから、平家に敵対反抗して滅びた「負け組」のこ
となどは詳しく伝え無くても良い！と思ったりもす
るのだが、平家物語は冒頭に「祇園精舎」を出した
から、どうしても「因果応報」に関わる話をセツト
で売りにするのである。その関わりから「奢(むこ)
る平家は久しからず」の伏線として中途半端な権力
を握った為に平家に対抗しようと大納言・藤原成親
が活躍していたのだがそれも失敗して失望のドン底
に突き落とされる。

あれこれと事態が進展する中で、鹿ヶ谷の反平家
運動では準主役ぐらゐの立場に居た法勝寺の執行・
俊寛僧都と平判官康頼(巻第一・鹿谷のこと、俊寛沙汰・鶴
川戦のこと、参照)の両名にも判決が下った。遠く薩摩
国に流されるのである。その際に藤原成親の息子(平
成盛の婿)である成経もついでに同じ場所に流さ
れることになった。但し成経は平家一族の婿である
から平家物語でも気を使つて、俊寛と康頼の島流し
に成経が同道することにしてある。結果的には同じ
であるが…。

此の三人が流されたのは薩摩(鹿児島)地方の「鬼
界が島」となっている。原本の注釈では鹿児島湾口
から南西へ五十五キロ地点にある硫黄島が比定され
ているけれども、地図には奄美大島の東に喜界島が
ある。どちらの島にしても昔は本土から簡単に行け
無い孤島である。「彼の島は都を出て遙々と、浪路を
しのいで行く所なり…おぼろげにては舟も通わず…
島にも人まれなり」という平家物語の記述に当時と
しては地球の果てぐらゐに思われていたことが想像
できる―以下の表現は都で贅沢三昧の暮らしをして
いた者の感想であるから差別用語が含まれている。

テレビであれば「不適切な表現が含まれている」こ
とをお詫びする場面であるが、原作者の意図を尊重
して原作に近い形で書きます―時々、浜辺などで見
かける原住民は日本本土の人と違って色が黒く(日焼
けで牛のようであった。(言い過ぎ)其の身にはやたら
と毛が生えていて(毛深く)話す言葉も分からない。

男性は烏帽子も被らず、女性は髪も下げていない
(大きなお世話)着る物が無いから人間らしくなく裸
で居る(暑いから着る必要が無いのである)養蚕の技も知ら
ず機織りもしない。農業従事者は殆ど居なくて農作
物が獲れないため、狩りや漁で殺生をして生きるほ
かは無いのである。島の住民さえ、その様な暮らし
であるから京都から流されて来た三人には生存権が
無い。「気の毒に!」と言つて終りにすれば此の章段
は早くも完結するのだが、実は平家物語には書いて
無いけれども藤原成経の義父である平教盛が政府に
代わり生活物資を送り届けていたらしい。(内閣に…)
「衣」と「食」の問題は解決したけれども島の中
には高い山が有つて年中噴火しているから硫黄の臭
いが立ち込めていて息苦しい。(その為に硫黄島と名付け
られた)噴火の轟音が四六時中していて山麓では常に
雨が降る。原本に「一日片時人の命耐えて有るべき
様も無し」と書いて有り、その通りだと三人は生き
延びられないから、或いは流された先が原本の文字
どおり奄美大島の近くにある喜界が島だったのかも
知れないし、解説書に依つては屋久島を推定してい
る。本当は何処の島か明確では無いが、平家物語の
作者がイメージで適当に推定して島の印象を書いた
らしい。

藤原成経は其の様な状況であつたけれども父親の
成親は備前・備中両国の境に在る庭瀬の山寺に置か
れていて「息子は鬼界が島へ流された」という情報

を耳にした。自分より罪が重い扱いであるから落胆
は大きいのだが、表面上は何気ない素振りであった。
しかし心中には絶望感があり「今は何事も期待でき
ない!」と仏門に入る決意をした。

小松殿こと平重盛に手紙を書いて、出家のことを後
白河法皇にお伺いをして貰った。法皇も止める理由
は無いから「許す」としか言えない。藤原成親は流
罪先の仮屋で出家し、昨日までの華やかな衣装(公家
としての)に変えて浮世を余所に墨染の僧侶の姿にな
つたのである。

藤原成親は間もなく現地で殺害されるのであるが
此の時に仏門に入る許可願を法皇に出す前に、取り
敢えず平清盛に宛てて出していたならば或いは死罪
を許されたかも知れない?平清盛は、大物だった割
りに単純なところが有つたらしいから…

成親も狡賢い人物なのに筋道の裏が読めない―死な
なきや治らない種類の俗物だった。それに対して次
の章段「徳大寺之沙汰」は平家に謀反を企んだ訳で
はないが、平家全盛の時代にちよつとした機転で大
将になれた人物の話である。成親という三流の男は、
あれこれと策を弄していた割には肝心なことがダメ
で知恵が足りなかつたのである。

ダメな奴は切り捨てて話を進めると、其の頃、大
納言・藤原成親の北の方は「小教訓」に書かれてい
るように京都の北部・北山の雲林院近くに隠れるよ
うに住んでいた。罪人の家族で無くても住み慣れぬ
場所は心細さが先立つものであるのに、「人目をばば
かり世を忍ぶ」身であれば思いわずらうことも多い。
平家の手前、生活保護も申請出来ず暮らし向きにも
困窮していた。かつては仕える武士や女房も大勢で
あつたが世間の目を怖れ人目を気にして訪ねる者も
無かつた。そうした中で出自は不明だが情け深い源

左衛門尉信俊と言う武士が居て常に北山の寓居を慰問していた。

ある日のこと、北の方が信俊を呼んで次のように言った。「確かな話では無いのだが大納言殿が流された先は備前の児島と聞いていたところ、実は有木の別所とかいう所に居られるらしい。そうであれば形だけでも拙(つたな)い手紙など差し上げて、お暮らしの御様子などをお聞きする事は出来ないものであろうか?」

是を聞いた信俊は思わず涙ぐんで答えた。「私は幼少の頃から(大納言様)にお仕えし、お目に掛けて頂きました。片時もお側を離れたことはありません。備前に流されたときも、どの様にしてもお供をしたいと申し出たのですが、六波羅の役人たちに許して貰えず力及ばぬことになりました。私をお呼びになつたお言葉も未だに耳に残っております。無理にでもお供しようとする私を諫められたお言葉も肝に銘じております。その様なことですから、私は如何なる目に会うとも手紙をお届する役目を果たしたいと存じます。どうかお便りをお書きください!」

北の方は非常に喜ばれて手紙を書かれ、それに倣(なら)って幼い子たちも父親に便りを出した。是を預かった信俊は、はるばると備前国有木の別所へ向かい、藤原成親が収容されている施設(と)言うほどの建物も無いがを訪れた。先ず詰めている警護の武士(責任者)の難波次郎経遠に面会を申し入れたところ、主人を思う志に感心して囚人(成親)と会うことを許してくれた。

折しも成親は都の事を思い出し「あの頃が懐かしい!」とか言いながら気落ちしていたところである。其処に声を掛けて「都から信俊が参りました!」と叫んだので、成親は「是は夢か!」と驚き、その場

に起き上がって「此処に來なさい」と呼び寄せた。信俊が近寄って見ると、其の住まいの粗末なことも驚きであるが大納言・藤原成親が墨染の衣を着て居たのでショックを受けた。

気を取り直した信俊は、まず成親の家族が無事であることを告げて、北の方から預かった手紙を渡した。思い掛けない便りに成親は嬉し涙にくれて、折角の書かれた文字も見え無いような様子で有ったが、とりわけ北の方が書かれた手紙の中で「…残された幼き者(子ら)が父親を恋いたう有り様は我が身が尽きるほどの悲しみであり、とても耐えられるものではありません!」という文面には大きな衝撃を受けたようで、妻子の便りを見てからは、自分が味わつた是までの都への郷愁など物の数では無い!と悲しんだのである。

こうして源左衛門尉信俊は藤原成親の許に四、五日を過ごしたのだが、原文に書かれた次の条が気に掛かる―勝手な推測ではあるけれども信俊は平清盛の指示で「死刑囚の最後の面会」をしたのではないかと―その文言とは「…信俊、これに候て(居残つて)御最後の御有さま見参らせん」と申しければ、あずかりの武士、難波次郎経遠、叶うまじきよし(出來ないと)頻り(しきり)に申せば、力及ばで(どうすることもできず)「さらば上れ(都へ帰れ)」とこそその給ひけれ」信俊は北の方などの手紙を託されて単に面会に來たのであつて「成親の最後を!」と言うのは偶然にしては設定が出来過ぎてゐる。

それに合わせて藤原成親は信俊に「私は近しい中に処刑されると思う。既に此の世に無いと聞いたときには、其の方とも再び会うことが出来ないのであるから心して私の後世を弔つて貰いたい!」と言つた、そして妻子への返事を書いたので信俊は其れを預か

り「また、参ります!」と言つて有木の別所刑務所を出ようとしたり。成親は「そなたが次に來るのを待てる身とも思われぬ。余りにも慕わしく思えるので、もう少し此処に居てくれ」と言つて、信俊を何度も呼び返したのである。

藤原成親が幾ら懇願しても其れ以上の滞在が許されなかつたので、源左衛門尉信俊は急いで都に戻り、北の方に成親の返書を手渡した。それを開いてみると、出家した証しともとれる一房の髪の毛が巻物になつた手紙の巻末に封じられていた。北の方は、それを一目見ただけで「是が形見(遺品)となるのである。夫の成親が生き長らえるのであれば嬉しいが今は見るのが辛い!」と、その場に泣き伏してしまわれた。幼い子らも声を出して嘆く様子は誠に気の毒であつた。

そうした家族の予感的中して前大納言・藤原成親は流罪となつていた備前・備中両国の境にある庭瀬の郷で死刑が執行されたのである。原本には「吉備の中山」と書いてある。慰めにはならないが其の辺りは日本の原初時代に一大勢力を形成していた「吉備王国」の中心地であつたらしい。

命日と言うか死刑執行の日は治承元年(一一七七)旧曆八月十九日とされる。平家に対する謀反の同罪で捕まつた西光法師は、既に述べたように平清盛に顔を下駄で踏まれてから首を斬られたのであるが、藤原成親の場合は待遇が良くて? 勧められて飲んだ酒に毒が入れてあつた。その際に死刑執行の特命を受けた難波次郎経遠が加減をして毒の量が少なかったか、或いは成親が警戒して呑まなかつたのか死刑囚は元氣であつた。困つた刑務官たちは近くに在つた六、七メートルの断崖から囚人を落とすことにして念の為に着地点に藁の束のように尖らせた杭を植え

た。平家物語の原本には「無下にうたてきし残酷なこと」と書いてあるが、源平盛衰記では「首を斬るのが気の毒と思つたので突き落した」となっている。多分、命令に従わざるを得ない現地の武士も一応は平家の親戚である現職大納言の処刑に躊躇したのであろう。

平家物語には無いが、源平盛衰記には殺害された藤原成親が死霊となつて死刑執行の関係者に祟りを為したことが書いてある。恨むならば命令を下した平清盛に取り付くのが筋であるが、やはり藤原成親は幽霊になつても、どこかズレている。成親の遺体は現地に埋葬されたのだが、何を間違えたのか自分を埋葬してくれた法師の家族に祟りを為したのである。軽率な人物は死んで亡霊に化けても軽率だったことになる。

藤原成親の死去を伝える知らせは、程なく北の方の許に届いた。嘆きには言うべき言葉も無いが「もう一度、生前に逢いたいと願う気持ちから今日まで仏門にも入らずに過ごしてきたけれども、今は其れも無駄になつた」と北の方は京都左京区の菩提樹院に於いて尼となり、一応は形通りの仏事を行つて成親の後世を弔つたとされる。

この女性山城守（京都府知事）を務めた敦方（あつかた）と言う者の娘である。勝れた美人として知られ、後白河法皇の後宮に召されていたが、法皇の身近に仕えた藤原成親が、俗な表現で言えば拝領したのである。それはどうでも、成親の遺児たちも亡き父の為に花を供え供養の水（鬮伽あむを汲んで祈り、故人の後世を弔つたのが哀れである。そうしている間にも時代が過ぎ去り世の中が変わつてゆくのである。その様子は仏教で「天人の五衰（ごんじんのごすい）」と言われる涅槃（ねはん）消滅の現象に同じである。天

人の五衰とはそういう生物がいるかどうか知らないが天人が死ぬ時に現れる次の五つの衰亡相を言う。
①衣服が汚れる ②頭上の花冠が萎（しぼ）む ③身体が穢れて悪臭がする ④腋下流汗 ⑤楽しめない：他説もあるらしいが：

大騒ぎをした割には、新興宗教のような幼稚な結末ではあるが「大納言死去」の話は是で終る。

徳大寺殿島詣（とくだいじいづくしまもうで）のこと

元本に依つては「徳大寺之沙汰（とくだいじのさた）」になつている。徳大寺という公家の話であるから大袈裟に言えば「沙汰」になるし、具体的には「殿島詣」である。

徳だか損だか知らないが同じ公家の藤原成親が、自分の所為で大損をした後に出て来た人物の神社参詣がテーマであるからバカバカしいとは思ふが平家物語の原作者としては墓穴を掘つた藤原成親の行動と対比して、言わば要領の良い例として此の話を創作したらしい。

平家物語巻一に「二代后（にだいのきさき）」という話があつた。右大臣・藤原公能の娘である多子が別系の養女となつて近衛天皇の皇后に立ち、若くして天皇に先立たれた後で天下第一の美女というので、後白河天皇の第一皇子である二条天皇から入内（いみ）だいの命令が来て泣く泣く二代の皇后になつた、という内容である。その多子さんの実兄は藤原実定と言ひ平家全盛時代には大納言であつた。「鹿谷」では大納言の筆頭に居たけれども平家人事に妨げられて出世がストップした。その時に藤原成親は新参者なのに平家の子弟に先を越された恨みから反平家運動

に走つたのであるが、気の弱い藤原実定は現代の若者を真似て「閉じ籠り」の日々を過ごして世を憐（あはな）んで出家しようと思つた。

是を案じたのが朝廷から付けられた家臣や家の武士たちである。家臣と言っても地方の国司以上の地位に居る官僚であるから出世のことには詳しい者が居る。その中で藤蔵人大夫重兼と言う管理職並みの人物は何事も心得ていて、或る月夜の晩に実定が南向きの格子戸を開け、月見がてら小声で詩などを口ずさんでいる所へやつて来た。

障子の人影を見て「誰か？」と問えば「重兼です」と答える。「何事か有つたのか？」と聞かれた重兼は「今夜の月は特に冴えていて、心の隅々まで澄み切つておりますので、思わず此方に足が向いてしまいました」と答える。大納言・実定は喜んで「良く来てくれた。私も何と無く心細く、また手持無沙汰で困つていたところだ」と言い、重兼を座敷に上げた。重兼も取りとめの無い雑談をしながら大納言を慰めていた。

始めは何気ない世間話などしていたのであるが大納言は思い直したように「……この頃の世間を見て見ると、平家の勢いは益々盛んであり、入道相国清盛の嫡子（重盛）と宗盛（二男）とが揃つて左右の大將になり、さらには三男の知盛、嫡孫の維盛が是に続くであろう。そう言う順序で平家人事が続いているならならば、他家の（平家以外の）公家は、何時になつたら大將になることが出来るのか全く見当もつかない（……とても成ることが出来ないであろう）それならば……そのこと出家してしまおう……と思ふ」と寂しそうに言つた。

此の言葉に対して重兼は、ハラハラと涙を流して次のように諫（い）きめた。「大納言様が御出家なさ

れ(大納言の地位を退かると、お仕えする上下多数の家臣たちが職を失い路頭に迷うことになりま。それでは困ります)そこで此の重兼が良い事を思い付きました:その方法と言うのは今、平家が信仰をしている安芸国厳島神社(宮島)に大納言様が参詣をなさることで。面倒でも七日間ほど宮島に籠られてお祈りを続けて下さい。宮島には「内侍(ないし)」という優美なる巫女(みこ)が大勢いて参籠の間、何かと持て成してくれま。その時に参籠の理由を聞かれたならば、ありのままに(天将になれるように請願をした)と答えてください。さらに都へ戻る際に巫女たちが名残を惜しむでしょうから其の時には主だった巫女たちを連れて都に戻って下さい。都に来た巫女たちは平家屋敷に行くでしょう。平清盛公は必ず、徳大寺殿はなぜ厳島を参詣したのであろう?と巫女に聞く筈です。巫女は正直に答えなくてはなりませんから、大納言様の思いが清盛公に伝わります。あの御人は物事に感激し易い方ですから、御自分が信奉する神に参籠された大納言様の扱いを祖略には出来ない!と気付かれるに相違ありません!」

是を聞いた徳大寺大納言は驚き「!それこそは私
が思いもつかなかった有難い策である。早速に実行しよう:」と、俄か(にわか)に思い立ち、寺社に籠る準備として精進潔斎(肉食を絶つなどして心身の清浄を図る)を始めた。やがて、徳大寺大納言の一行は遙々と厳島神社に参詣したのである。神社には藤藏人大夫重兼が言ったように美人の内侍(巫女)が集められており、徳大寺大納言参籠の間、昼夜ともに歓待すること限りがなかった。原本には書いて無いが、大納言は厳島神社に膨大なお賽銭を奉納したのであろう。

神社側の持て成しも半端では無く、大掛かりな舞

楽が三度も行われ琵琶・琴の演奏から神楽や謡曲、当代流行りの朗詠、遊宴歌曲などで大納言も満足する接待ぶりであった!本来の神社参詣とは異なる愚行であるが目的は達したのである。筋書きどおりに、途中で巫女たちが「平家のお身内では無い方が当社に籠られるのは珍しいことです。何事を願われるのですか?」と聞いてきたので大納言は、重兼が書いた脚本にあるセリフを間違わないように「自分が願う大将の地位が他人に越えられてしまわないことを請願する:」と巫女たちに吹き込んだのである。

七日間の参籠が終わって大納言の一行が厳島を去ろうとする時に、是も予定どおりに巫女たちが十数人ほど舟を仕立てて送る:という。出来の悪い芝居のように名残惜しんで、今少し今少しと都について来た巫女の集団は徳大寺殿の屋敷に收容された。捕虜では無いから様々な接待を受け充分なお土産を貰って、後は修学旅行並みに自由時間が与えられた。

巫女たちは藤藏人大夫重兼が予想したとおりに「折角、都に来たのだから我が主である太政入道殿(平清盛)に御挨拶をしよう」と西八条の館へ押し掛けた。報告を受けた入道は、思いも寄らぬ訪問者に驚き「何事が起きたのか?」と巫女たちに訊ねた。これも藤藏人大夫重兼の予想どおりで、徳大寺大納言が宮島に参詣した経緯を清盛が知るところとなった。大納言の宮島参詣は誰が見ても「野心見え見え」の行動であるが、清盛は「祈願する神社、靈験あらたかな神社仏閣が数ある中で平家が崇拜する宮島に請願するとは奇特殊勝な心がけである:それ程に切なる願いであるならば」として嫡子・小松殿(重盛)に

内大臣兼左大将を辞任させ、右大将であった次男・宗盛を越えて徳大寺大納言実定卿を左大将にしたの

である。

原文は「新大納言(成親)も斯様に賢きはかり(こ)とをばし給はで、よしなき謀反をおこいて(起して)我が身も亡び、子息所従に至るまで、かかる憂き目を見せ給ふこそうたてけれ(遺憾)で終わる。徳大寺の策も膨大な経費を必要とするから誰にでも出来ることでは無い。人間は保身の為には考え付く最善の方法を執るが、それが成功するか否かは運なのか神仏の御加護なのか:実はこの章段の話は虚構とされており、実際には藤原実定が左大将になれたお札に宮島参詣をしたらしい。平家物語の作者は「負け組代表」の藤原成親を引き立てる目的で此の調子がいい話を書いた?

3月号は、3月7日発行となります。読者投稿又は毎月25日が締め切りとなります。

《ふる》

フリスティック・蕎麦会席料理のお店です。

(キター文化館通の)

看板娘(犬)「つらら」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-24-2063

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会は、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を基本軸として、自分の思いや考えを言葉に表現していこうと集まった者達の会です。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、その思いを言葉に表現することで希望の風を吹かせたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

風の言葉絵同好会参加者募集

全てが自由で自在であれ、のふるさと風の会から生まれた、兼平智恵子の風の言葉絵。

この新しい自分表現の「風の言葉絵」を楽しむサークルでは、一緒に言葉と絵を楽しむ参加者を募集しています。

詳しくは、兼平智恵子(☎ 0299-26-7178)へお問い合わせください。

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

ことば座団員」&「朗読教室生徒」募集!!

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。物語や詩を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じる必要があります。

何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月二回程度の授業(受講料:月額 3,000 円)を考えております。

連絡先 080-3125-1307(白井)